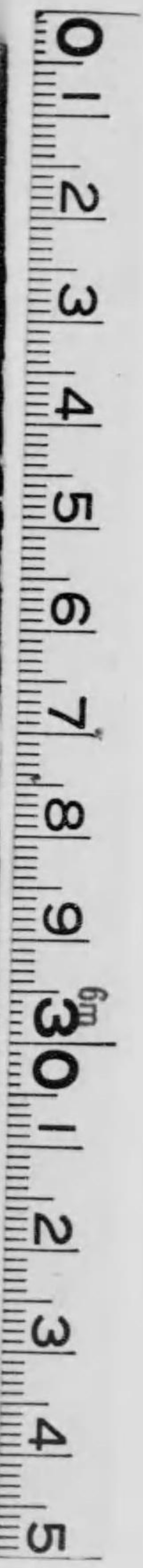


902
Ku69



始



角 1-223

350-293

902
Ku69

文藝思潮論

厨川白村著

大正
8.5.1.
附交

Wilt thou yet take all, Galilean ? but these thou
shalt not take,
The laurel, the palms and the paeon, the breasts of
the nymphs in the brake ;
Breasts more soft than a dove's, that tremble with
tenderer breath ;
And all the wings of the Loves, and all the joy
before death ;
All the feet of the hours that sound as a single
lyre,
Dropped and deep in the flowers, with strings
that flicker like fire.

—Swinburne, *Hymn to Proserpine*.

巻頭に

ことし正月の時事新報文藝欄に、私は自分の著書に就て下のやうな事を
書きました。

「私は自分の専攻の學科が西洋文學にあるのですから、十數年來その方の
書物ばかり讀んでゐました。しかし今まで別にそれを講義したり、或は他
人さまに吹聴しやうといふ必要もなかつたのですから、謂はば唯だ自分勝
手な好きな道としてやつて來たに過ぎないので、ところが數年前わが文
壇に、西洋の自然派や象徴派の文學が喧傳され、それ等に関して色々の議
論のやかましかつた頃の事です。私の親しくしてゐた學生のうちで文藝に
熱心な一部分の人たちが、さういふ最近文藝の問題に就て一般的の智識の
得られるやうな講義をして呉れよと望まれました。なるほど考へて見ます
と、さういふ方面の正確な智識は一般の學生はいふまでもなく、また文壇
以外の教育家とか或は宗教家とか、或は政治家とかいふ人たちにも、甚だ

必要なものであるにも拘はらず、西洋の學者でまだ、之に就て纏まつた組織的研究の書物を公けにした人を聞きませんでした。そこで私も自分ながら大膽な寧ろ横着な企てだとは思ひながら、とにかく乞はるゝ儘に、さういふ講義を一つやつて見やうといふやうな受合ひをしたのです。ところが實際やつて見ると、果して中々うまく行かない。なるべく方法的に組織的に、秩序を亂すまい、手落の無いよう心掛けると、なほさら話が前後したり錯雜したりして大に閉口しました。のみならず實際講義をして見ると、有名な作品で名ばかりはとくに知つてゐても、お恥かしながらまだ読んでゐない物が澤山あるので、急にそれを取り寄せて讀む必要を生じたり、或は嘗て以前には讀むだ本でも、講義の材料にしやうなぞといふ心掛けで讀むだのではないのですから、何頁のどこにあつたといふやうな事も思ひ出せないし、急に調べてもなかく出て來ないといふやうな次第、或はまるきり忘れて了つたのさへ多くつて、實に困つたのです。しかし聽講者の熱心に勵まされて、とにかく至みなりに一年間その講義を續けて、一段落を告

げました。ところが其後になつてまた學生の或る人たちから、あの講義は本にして出版したらいいでせうと、いくたびか勧められました。元來私は自分勝手な人間ですから、以前から時々興に乗じては、自分の讀むだ本などに就て、つまらない事を雑誌や新聞に断片的に書き散らした事はあつても、纏まつた著述といふやうな面倒な仕事はして見る氣もなかつたのです。第一講義のノオトを文章に書き直して、それを訂正し、清書して、また印刷の校正をするといふやうな時間と勞力が、自分の研究のためには何にもならない事だし、それよりまだ讀みもしないで徒らに机の前に積んである本の一冊でも、早く形付けた方がよからうといふ風な、甚だ身勝手な事ばかり思つてゐたのです。しかし恚うやつて講義出版の事を勧められて見ると、成るほど自分でも一年間相應に頭を苦しめたものであるのですから、其儘に棄てるのも實は少し惜しいやうな氣がしました。そこで煽てられるが儘に、また一年間それを書き直す事にかゝつて漸く出版したのが、あの拙い「近代文學十講」であつたのです。

文藝思潮論

幸ひにしてあの數ならぬ小著は皆さまからの歡迎を受けましたが、之は自分に取つては全く望外の光榮とする所で、厚く讀者諸君の好意を感謝して居ります。それにつけても自分が後になつて氣付いた多くの不備な點なぞに想ひ到ると、眞に慚愧に堪へないのです。(中略)

實は私のあの著書には別に一つ大なる缺點がありましたので、之はどの批評家も申されませんでした。自分ではそれを氣付いてゐるだけに、獨り筋かに氣が濟まないやうに思つてゐるのです。それは外でもないのです。近代文學の評説として、あの本には全く現代文藝思潮の歴史的觀察といふ者を缺いてゐます。申す迄もなく近代學藝の進歩はすべての研究にこの史的發展の説明を要求して居りますのに、あの本には其方面の事を全く省略しておきました。歐洲文藝思潮史の根本に立ち歸つて、現代文學の由つて來る所以を説かなければ駄目だと思ひました。だからあの書物には説き及ばなかつた最近西歐文壇の事實と共に、之に對する私みづからの獨立した歴史的解釋を纏めて、更に今一卷の新しき著述に、前著の不備を補はう

と思つて私は筆を執る事にしたのです。違からずそれを出版したとき、更にまた江湖の諸賢に教を仰ぎたいと思つて居ります。

かういふわけで出來たのが即ちこの「文藝思潮論」ですから、さきの「近代文學十講」と重複するやうな點は、本書に於てすべて省略することになりました。

本書のなかに用ひた基督教思潮といひ、異教思潮といふ言葉は、普通に云ふのよりも遙に廣い意味に用ひたので、それは本書十五、十六頁にある對照の表に見るやうな、色を異にした二つの思潮に名づけた假の名に過ぎないのです。基督教とか希臘思想とかふ文字に拘泥して、そのため誤解をせらるゝことの無いやうにと、特に此點をおことばりして置きます。

大正三年四月二日

伊豆修善寺の客舎に於て

著者

文藝思潮論目次

第一 序論

文藝の組織的研究——研究と鑑賞と——ラス
キン——文藝思潮の歴史的解释——歐洲の二
大思潮——靈と肉、神性と獸性——バイロン
のマンフレッド——テニスン——ドストエフ
スキイの「罪と罰」——基督教思潮と異教思
潮——希臘思想——二大思潮の比較對照

第二 思潮史の回顧(古代)

1 肉の帝國……………一七

希臘の文明——現代に及べる希臘思潮のなが
れ——その源泉——羅馬帝國末期の頽廢——

目次

帝王の暴虐——皇帝ニイロ——美的生活

2

靈の曙光

.....二五

ベトレヘムの星——基督の教——「パンは死せり」——ミルトンが基督降誕の歌——アラウニンク夫人の「死したるパン」——歴山府時代——背教者シュリアン——イブセン作「皇帝とガリレア人」——メレヅコウスキイ作「群神死滅」——キングスレイ作「ハイメシア」——當時の哲學——新プラトオン派の思想——プロテイモスの哲學——シルレル「世界の四期」

第三

思潮史の回顧(中世)

.....二五

戰國時代と週世主義——宗教的禁欲主義——肉を虐ぐること——聖フランシス上人——智

識の禁歴——中世の哲學——かくれたる異教思潮の勢力——中世傳説、フアウスト——藝術的要求——ハイネの「流論の神々」——「カルミナ、アラナ」——ハイタアの所説

第四

思潮史の回顧(近世)

.....二七

1

近代思想の黎明

.....二七

近代思想の源泉——古學復興——異教思潮の復活——人間本位の思想——新文學の勃興——肉の美と造形藝術——各國の繪畫彫刻——ルネッサンスの年代とその歴史的意義——「モンナヴァンナ」

2

近世史の波瀾

.....二九

思想史上の波瀾——二大思潮の混淆時代——十七八世紀の思想界(第一)宗教改革——(第二)

主智的傾向——狂熱の反動——智識萬能主義
 ——ペイコン、デカルトの哲學——啓蒙運動
 ——(第三)古典主義の文學——古典の研究とその崇拜——藝術上の法則——文字の彫琢——佛蘭西路易十四世王朝の文學——英國の古典派文學——形式模倣と似而非古典主義
 カントの哲學——ルッソオの思想——浪漫主義——自然派時代——近世史上基督教思潮と異教思潮の混合と其消長——二十世紀現代の思潮——基督教思想の受けたる二つの打撃——(參考)二大勢力の衝突——懷疑思想對神祕思想

第五 希臘思潮の勝利……………三〇

1 靈肉合一觀……………三〇

ロバトスンの希臘思想論——靈肉合一觀——歐洲最近の反物質主義——象徴主義——肉の讚美者ホキットマン——肉の要求と靈の要求——千八百八十九年

2 聰明の智力……………三六

明敏なる理智——マシウアアノルドの所説——シヨウ、アナトオル・フランス——嚴正と明晰——希臘藝術の特色——クラシシズム——ニイチエの悲劇發生論——希臘人の運命觀——諦めと努力——人生全面の觀察

3 現在生活の享樂……………三五

今人の現世主義——今日を享樂せよ——レミ・ドウケウルモン——現代の宗教——オイケン
 の宗教觀——建築におけるゴシック式とルネッサンス式——ラスキンの説——希臘人の現世

思想——人間本位——神の思想——ゴイナス
——ニイチエの美的個人主義——其超人説——
——シヨウの「人と超人」——神と超人と——
アルモンの説——希臘のアンテイアス——自
我の解放——個人主義——希臘人の神——聖
書——プロメシアスと約百の比較——政治上
の自由——モオリス・パレスと「自己の崇拜」——
その作品

4

42 美の宗教

肉感美の崇拜——美と善の一致——希伯來思
想との比較——肉體の美——男性美——ロテ
ン——ハイタア——ワイルド——ダモンチオ
——ビエル・ルイ——レオン・バグスト——参考
書

一三

第六

EPILOGUE

一九

現代文學の新潮

一九

現代藝術の思潮——生活の愛慕と享樂——ヒ
ユウマニスト——最近の佛蘭西文學——過去
の人ビエル・ロテイ——新傾向——懷疑厭生の
舊思想——實行的努力——人生の實際的傾向
と文藝の觸接——新傾向の代表作——家族主
義——自我主義と共存主義——祖先の信念に
歸ること——「人生派」の文藝——クロオテ
ルの絶叫——其詩風——この派の諸家——ロ
マン・ロランの「ジアン・クリストフ」——加特
力教復活——希臘戰士の生活

文藝思潮論

厨川白村著

第一序論

文藝の組織的研究——研究と鑑賞と——ラスキ
 キン——文藝思潮の歴史的解释——欧州の二
 大思潮——靈と肉、神性と獸性——バイロンの
 マンフレッド——テニスン——ドストエフ
 スキイの「罪と罰」——基督教思潮と異教思
 潮——希臘思想——二大思潮の比較對照

'A convent and self-quenching;—cloisters would seem to me like holy dew. But
 that would be sleep, and I feel the powers of life.'
 —George Meredith, *Diana of the Crossways*, chap. vii.

第一序論

僧院の生活と自己抑損と、——いかにも修道院は神聖な露のやうに私にも見える。しかしそれは眠りである、自分は飽くまで生の力を感ずる者だ。(メレアイス)。

私はいつも、花やかなすぐれた藝術品の貴さをおもふとき、蠟を嚼むが如き乾燥な論議をこれに加へるのを、憚らずには居られない。理路に走つたこちたき主義の論や、人生觀のむつかしい説を暫く後廻しにしておいて、唯だ夫れ藝術品としての強大なる力に感じ、美しさに酔ふてゐたいとのみ思ふ。かの血の氣の涸れた科學者が實驗室に閉ぢ籠つては、美しい花や寶石に、遠慮會釋もなうべたくと學名の札を貼り付けて、分類して行くやうな真似を、私は成るべくならばしたくない者だと思ふ。

しかし文藝の研究は、今日に於て既に嚴然たる一科の學であ

る。學問である以上、近世のすべての智識は、必ず系統的組織的の體制を必要とする。單にあの作は面白い、此作は巧いなどと、雲を掴むやうな呑氣な事ばかり云つても濟まされない。また在來多くの文學史や美術史がしたやうに、唯だ徒らに名高い作品や作家を、年代の順などに臚列し叙述しただけでも、満足されないであらう。たとひ獨乙の或る一派の學者たちがするやうな煩瑣な無味な詩文研究の法を執らずとも、とにかく或る程度に於て、解剖のメスを使つたり、分類の札を貼ることは、研究者として避くべからざる必然の道であらう。

研究と享樂と、また論議と鑑賞と、これら二つのものは、しかしながら、さまで不調和なものであらうか、自分は決してさ

うは思はない。否な寧ろ兩者は立派に併立せしむべきもので、研究批判に得た精確なる智識を基礎にした鑑賞の可能は、自分が年來の確信であつた。従つて私に取つては、たとへばかの Ruskin が一代の名著『近代畫家論』(Modern Painters) に用ひたような詩情と趣味に富むで、而かも整然たる秩序と論理の正確を亂さない研究の方法。——謂はば理趣情景相待つと云つたようなやりかたが、先づ學徒として藝術品を取扱ふ唯一の道であるように、今もなほ信じてゐる。私は藝術に對してどこまでも精緻嚴密な研究を積むと共に、かのシルレルが、

Auf deinen Lippen selbst erkalte

Der Liebe Kuss, und in der Freude Schwung

Ergreift dich die Versteinung.

—Schiller, Poësie des Lebens.

爾の唇には戀の接吻も冷かに、また喜びの高まる中にても、爾は化石となる。(シルレル「人生の詩」)

と嘲つたあのやうな枯淡なる學究ではありたくないと思ふ。

さて西洋文藝の系統的研究に入るとき、先づ其第一歩として、近世のすべての學藝が要求する歴史的発展の説明がなくてはならぬ。即ち文藝の根底を流れてゐる思潮が、果して如何なる源に發し、いかなる變遷を経て今日に至つたか、現代文藝の主潮はいかなる歴史的解釋を加へらるべきものか、この點に關して、成るべく首尾一貫した纏つたる説明を試みたいといふのが、此小著の目的とするところである。

● 歐洲の文明史を繙いた人は誰しも、其根底には、明かに人間

の本性に基いた二つの異つた潮流が横はつてゐる事に氣がつく。著るしく色調を異にした二つの流れが、そこに一盛一衰、一勝一敗の争ひの歴史を繰返して來たといふ事實に、強く注意を惹かれるだらう。これが即ち史家の所謂、人性の異教的基督教的二元論、英語でいふ the Pagan-Christian dualism of our human nature で、私の論の出発點も亦たここに在る。

むかしの埃及人は種々さまざまの奇怪至極な神體を彫つた。それらは頭だけが犬猫或は猿鰐などの類で、からだは全くの人間である。中でもかの女頭獅身の sphinx は、一番ひろく世に知られたものだ。それから希臘人もまた同じやうなことを考へて、半人半獸の Pan や Centaur などを持つた。これらは果して何をあ

らはし何を意味するものであらうか。考古の學者の煩瑣な所説はしばらく措いて、これら半人半獸の像は、はやく既に古代人類の胸奥に兆した靈肉の闘争、神性と獸性との不調和の問題に對するかれ等の極めて幼稚な、また原始的な一種の解決法を示したものだとも見ても必ずしも牽強附會ではなからうと私は思ふ。

靈と肉と、聖く明るい神性と醜く暗い獸性と、精神生活と肉體生活と、内なる自己と外なる自己と、道德を基とした社會生活と、自然の本能を重むる個人生活と、これら二つの者の間の不調和は、苟くも人類が思索といふ事を始めてよりこのかた、その苦惱煩悶の素因であつた。如何にかして靈肉の調和を求めたいと焦心するのは、殆むど人類一般の本性であつて、之が今日

までの人文發達史の根底に伏在する大問題であつた。
Byron が悲曲『マンフレッド』"Maufred"の主人公は、獨り Jungfrau
の峰に立つて嗚う叫むた。

How beautiful is all this visible world !
How glorious in its action and itself !
But we, who name ourselves its sovereigns, we,
Half dust, half deity, alike unfit
To sink or soar, with our mix'd essence make
A conflict of its elements, and breathe
The breath of degradation and of pride,
Contending with low wants and lofty will.

目に見ゆる此世界の美しさ。その創作もそれ自らも花やかなる
かな。されども自ら稱してその主權者なりと云へるわれ等人間
は、なかば塵にしてなかばは神。沈まむこともまた上らむ事も
共にかなはず。獸性と神性と二つ相交はれるわれ等が本性は、

その要素互に相争ひて、一は卑しく一は誇りかに、低き慾求と
高き意志と争へるなり。『マンフレッド』第一幕第二場)

またかの Tennyson が十二篇の『國王牧歌』"Idylls of the King"にあ
らはした思想も、要するに、Arthur 王が地上に建設しやうとし
た神聖な理想の王國か、王妃の道ならぬ戀に起つた肉のけがれ
に破られる靈肉の争といふ事を中心にしたのであらう。更にこ
れらとはよほど懸け離れた種類の文學で例を取れば、Dostoevsky
が『罪と罰』の深刻な心理描寫も、畢竟あの個人主義的な自我狂の
Raskolnikov に於て人間の肉の方面を代表せしめ、また賤しい賣
春婦ではありながら心けだかき Sonia といふ女に於て神聖な靈
的生活を代表させ、つまりはこの二元の争を描いたのである。

唯だ前者が遂に後者ソオニアによつて感化せられ、靈肉一致の生活に入るところまでを書いたのは、此露西亞近世の大作家が他の詩人と異つた點であらう。

二つの力の衝突するところに、人生のすべての悲劇は生ずるのである。理想と現實と、個人と社會と、理性と感情と、智識と信仰と、——そしてまた肉と靈と、これらのものの衝突し分裂するところにこそ、人生の最も慘澹たる悲劇が見られる。そして人生の眞味は、また實にこの悲劇のうちにあるのではなからうか。

この靈肉闘争の問題は、歐州では、靈を重むずる基督教思想に對し、肉を貴ぶ異教思想 Paganism の争となつた。或はまたこれ

を冷かな精神的思索的の北歐思潮と、熱烈な肉慾的本能的の南歐思潮との對立と見るも可からう。わが國で云へば、『古事記』にあらはれた神話時代からの日本人固有の思想こそ、その現世的肉なる點に於て、まさに歐州における異教思潮に比すべきもので、後に這入つた儒佛二教の思想は、ちやうど基督教思潮の立場に類するものだと思つてよい。

基督教に對する反基督教思想たる異教思潮の源は、やはりすべての歐州文明の源である希臘に發した。だから名づけて希伯來主義 Hellenism に對する希臘主義 Hellenism とも云へば、或はまた基督教崇拝に對して希臘の酒の神、歡樂の神なる Dionysus の崇拝とも呼ばれ得るのである。

この二大思潮の特色に就て稍々詳しい説明は、後段に至り現代の異教思潮を説く時に譲つて、ここでは單に兩方を對照して、その最も著るしい相異の點だけを擧げるに止めやう。

むかし希臘の Delphi に在つた Apollo の神殿に録された名高い言葉がある。それは

Γνῶθι σεαυτόν (なむぢ自らを知れ)

Cicero の拉句譯 (*Tusculanae Disp., i, 23, 52*) には、*nosce te* とある。

といふのであつた。ところが之に對して基督教の聖書を見ると、恁ういふ句がある。

『エホバを畏ることは智慧の根本なり、聖き者を知るは聰明なり。』——箴言第九章十節

一は希臘哲學の祖 Thales の語として傳へられ、他は Solomon 王の教として今日に残つてゐる。そしてよく考へて見ると異教思想と基督教思想との根本的差異は、この簡単な二つの文句に盡くされてゐる。先づ「なむぢ自らを知れ」と説くのは、人に向つて個人的に自覺せよ覺醒せよと促がすもの、従つてまた自我中心の思想 *egoentrism* であり、自由主義の思想である。之に反してエホバの神を畏れよと訓ゆるのは、神を尊び其權威の前に絶対の服従を強ゆる所謂教權主義に他ならない。前者は飽くまで人間本位 *human* の現世主義であるが、後者は未來をいひ天國を説く神本位 *divine* の思想だ。

更にまた他の方面から云ふと、基督教が天國を慕ひ理想にあ

こがれる靈を重むるに對して、希臘思想は、地上の現實に執せむとする肉の解放を主張した。基督教のごとくに利他を説かずして、先づ自我の満足と、個人生活の充實を要求するのがその特徴だ。従つて平和を頌するよりは、寧ろ戦争を歌ひ、英雄を嘆美した。超自然スーパチュールではなくして、人間の本能を重むる自然主義こそ希臘人の信念であつた。前者には、だから、肉慾的分子が多く、後者には禁欲生活の美が貴ばれた。かくて一方が歐洲人の藝術的意識を代表すると共に、他の一つが宗教的・道德的意識の中心となつたのはまた當然の成行きであつた。

最後に、思索の傾向から云ふと希臘の方はよほど智的であり、客觀的であつた。従つて自然の精緻なる觀察に長じ、それが遂

には歐羅巴近世の科學的精神智識的欲求の淵源となり、素因となつたのである。然るに基督教思想の方では之と反對に、主觀的傾向が主になつて、想像や感情の豊富が、たしかに其大なる特徴をなしてゐた。

以上述べた事を約めて對照の表にして掲げると、

靈的、禁慾的……	肉的本能的
神を知れ……	爾自らを知れ
絶對的服従……	個人的自覺
敎權主義……	自由主義
天國、神本位……	現世人間本位
利他主義……	自我の満足
超自然主義……	自然主義

基督教思潮
(希伯來思想)

異教思潮
(希臘思想)

宗教的道德的……………智識的藝術的
 信仰的獨斷的……………科學的實驗的
 主觀的傾向……………客觀的傾向

憊うした全く色のちがつた二つの思想の流れは、現代に至るまで果して如何なる道を辿つて歐州文明の歴史を彩どつて來たか、それをかい摘むで次の數章に述べやうと思ふ。

第二 思潮史の回顧(古代)

1 肉の帝國

希臘の文明——現代に及べる希臘思潮のな
 れ——その源泉——羅馬帝國末期の頹廢——
 帝王の暴虐——皇帝ニイロ——美的生活

“To the glory that was Greece,
 To the grandeur that was Rome.”

—E. A. Poe, *To Helen.*

ありし昔の希臘のほまれに、
 ありし昔の羅馬のさかえに。

——ボオ、「ヘレンに寄す」

地中海の浪に洗はれた南歐の美郷、山水明媚の希臘半島の一角、
 Attica の州に、光芒燦然たる文化の輝きを見たのは、今か

第二 思潮史の回顧(古代)

ら云へばもう二千年にも餘る遠い昔であつた。その豊麗な思想と藝術とが、ながく百代の民衆を動かして、影響感化が遙に現代にまで及むのであるといふ事實は、それ自らに於て既に世界文明史上の一大壯觀たるを失はないのである。先づ言葉が何よりの證據、*exotism, politics, democracy, drama, comedy, anarchism, philosophy, history, physics, arithmetic, academy, geography* 挙げればまことに際限も無からうが、とにかく歐州人が今日、一日も使はずに居られないし、また吾々日本人までがいつも夫れを借用してゐる憚ういふ大切な言葉が、みな古代の希臘語その儘であるではないか。

希臘の文化は忽ち他國に傳はつた、縁もゆかりも無い——否、
 かどうかすると敵であつた他の民族をさへ感化した。羅馬人が

先づ之を學むだのは云ふ迄もないとして、あの使徒保羅の如き、基督教思想を提げ來つて希臘人を愚なりとさへ嘲つた者が、なほ且つ希臘の詩文に學ぶところあつたのは面白い。爾後この思潮の勢は一弛一弛、時に或はかくれ或は現はれて、複雑多趣なる歐州人文史の根底を流れた。羅馬帝國亡むで後は、暗黒の中世にかくるる事幾百年、この思潮は遂に猛然として、近世文明の淵源である文藝復興期の伊太利にあらはれたのである。それからまた暫くすたれてゐたのが、十八世紀になつて *Winckelmann* の古代藝術史論となり、轉じてまた *Goethe* にうつされて、殆むどすべての十九世紀以後の文藝に影響した。近代に於ては、*Nietzsche* の思想こそ最も大膽に、また最も痛快に、この希臘思想

を宣傳したものであつた。

おのづから山水秀麗の氣にはぐくまれ、また民族固有の富澹なる想像力に彩どられて、希臘の國土にあの美しい神話や傳説の出來たのは、今から約三千年前の *Homer* よりも、なほもつと遠い遠い昔であつた。それが漸く進むで遂に紀元前五世紀の頃 *Pindar* の時代に至つて、文物典章の美は備はり、詩文藝術の上にも千古不朽の大作が現はれた。そして之が後の所謂希臘思潮の源泉である事は、西洋史を繙いた人の誰しも知る所であらう。

ちやうど日本が印度や支那から儒佛二教の思想を受け入れて、之を同化したやうに、この希臘思想をその儘繼承したものこそ羅馬人であつた。かの「七丘の都」を中心とした羅馬大帝國の文明

は、確かに人類が嘗て建設した最も光榮ある偉業ではあつたが、その根底をなしてゐたものは、矢張希臘思潮に外ならなかつた。まかし羅馬人は、希臘人のやうな聰明の智力と節制の美德を缺いだ。肉の歡樂を求めて飽くことなく、情熱の奔放に任せては、遂に頽廢靡爛の極度に達しなければ止まない南歐拉甸民族の特徴を、かれ等は遂に遺憾なく發揮するに至つた。唯ださへ現世的個人的自然主義的の希臘思想が、この節制なき羅馬人の生活に移された結果として、羅馬帝政の末路は甚しく荒廢した。文明爛熟期の常として、人は唯だ樂欲の巷に本能の満足を求め、歡樂の毒酒に酔ふて、また他を顧みなかつたのである。後代の史家が呼ぶで「羅甸頽廢期」 *Decadence Latine* といふ時代は、即ち此

の帝政の末年だ。英國十八世紀の歴史家 Edward Gibbon かつて羅馬の廢墟を逍遙し、古への帝王が榮華のあとを吊らふて、懐古の感に堪えず、椽大の筆を揮ふて、遂にかの羅馬衰亡論 “The Decline and Fall of the Roman Empire” 七卷の大著を完成した。異教文明爛熟の時代を精論細叙して殆むど餘蘊なきものである。

その頃の帝王が殘忍横暴を極め、榮耀榮華の限りを盡くした有様は、到底今日の吾々が想像の外であつた。例の肉慾の満足と快樂主義とを極度まで持つて行つた結果は、遂にかの Caligula や Nero のやうな、先づ東洋で云へば桀紂にも比すべき暴君の代となつた。皇帝カリグラが、生前すでに自分を神として禮拜せしめ、或は澤山の人民を饗宴に招いて、さて兵を放つて之を皆

海中へ追ひ落し、何の意味もない虐殺を樂しむだといふやうな類の話は數かぎりもない。また小説ではあるが、波蘭の Dzielniowicz の名作『何處へ行く』“Quo Vadis” を繕ふ、或は英國の Farrar 正の筆に成つた名高い物語『闇黒と黎明』“Darkness and Dawn” や伊太利の劇作家 Ossa 又は現英の詩人 Stephen Phillips の史劇『ニイロ』などを讀むだ人は、その中に生けるが如く描かれた皇帝ニイロが、人を人とも思はぬ殘忍非道の所行に戰慄を覺えない者は無かろう。わが國の歴史で、所謂『美的生活』の標本に擧げられた清盛入道の專横などより、遙かに烈しい毒々しいものであつたらうと思はれる。今もなほ殘つてゐる遺跡で、羅馬名所の隨一、バイロンが『チャイルド・ハロルド巡遊』“Childe Harold's Pilgrimage” の

有名な絶唱に壯麗の詩句を聯ねて懐古の感を寄せたあの Coliseum
などは、當時猛獸と人間とを戦はせ、gladiatorの眞劍勝負に、流
血の慘劇を何よりも面白がる十萬の群集が、やんやと喝采した
圓形の演戲場であつた。また古今東西にわたつて浴場といふも
のは、淫靡の風俗と殆むど離れがたい關係のあるものだが、之
も羅馬帝政の末期の名物の一つ、浴場(特に温浴場)の設備といひ
建築といひ、眞に宏大な贅澤の限りを盡くしたものであつた。
一々恚ういふ事例を挙げれば殆むど無限であるが、敗徳亂倫の
風一世に瀾漫して、異教思潮の本能的快樂主義自我中心主義の
極端に走つたのが、羅馬晩期の状態であつた。

2 靈の曙光

ベトレハムの星——基督の教——「マンは死
せり」——ミルトンが基督降誕の歌——ブラ
ウニング夫人の「死したるマン」——歴山府時
代——背教者ジュリアン——イブセン作「皇
帝とガリレア人」——メレヅコウスキイ作
「群神死滅」——キングスレイ作「ハイムシア」
——當時の哲學——新プラトオン派の思想——
——プロテイエスの哲學——ミルレル「世界の
四期」

“The dawn of Christ is beaming blessings o'er the new-born world.”

—— H. H. Boyesen, *Earl Seward's Christmas Eve.*

基督の曙は、新しく生まれし世界の上に、祝福の光を照らしぬ。
(キイホヤム)。

“Where we finish they shall begin. Let Hellus die ! Men shall dig up her relics

第二 思潮史の回顧(古代)

—unearth her divine fragments of marble, yea, over them shall weep and pray!
From our tombs shall the yellowed leaves of the books we love be unsealed, and
the ancient stories of Homer, the wisdom of Plato, shall be spelt out slowly anew,
as by little children.”

—Merejowski, *The Death of Gods*, chap. xxi.

「吾々のなし終つた所から後世の人は始めるでしよう。ヘラスは亡むでも宜しい。人々が其遺物を掘り出し、大理石の断片を取つて来て、泣いて祈る時がまたあるでしよう。吾々の墓からは、吾々の愛讀した書物の黄色くなつた紙が取り出され、ホオマアの昔話やプラトオンの教など、小供が本を讀むように、またそろ／＼と讀まれる時があるでしよう。」(メレヅコウスキイ)。

羅馬帝政の末年、人は肉の歡樂に飽き果て、その生活は疲勞し頽廢し靡爛し盡くして、頻に新しき何物かを求めつつあるとき、はるか東方 ^{ベツレヘム} Bethlehem の空に、靈の曙光は現はれた。

「夫れイエスはヘロデ王の時ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、其とき博士たち東の方よりエルサレムに來り、曰ひけるは、ユダヤ人の王として生れ給へる者は何處にいますや、われら東のかたにて其星を見たれば、彼を拜せむ爲めに來れり。」馬太傳第二章一、二。

肉的現世主義に飽き果てた當時の人心に向つて、默示を説き天國を教へ、禁欲愛他主義を奨めて、其靈的宗教的慾求を満足させようとしたのが、即ち基督の教であつた。さきに述べた皇帝ニイロの暴虐の如き、即ちこの基督教徒に對する猛烈なる迫害となつてあらはれたのは、當然の結果である。(羅馬歴代の皇帝は、皆甚しい迫害を基督教徒に加へた。しかし殉教者は死に臨むで少しも騒がず、聖なる教の爲めに身を殉ずるのを、此上もなき幸福なりとして天に感謝し、現世の肉的生活をすてて天

國に行くことを樂しむだ。この偉大な信仰の力が、また大に一部の人士を感動させたので殉教者が流した血こそ他日教會の勢力の基をなしたのだ。(Semen est sanguis Christianorum.)

すべての點に於て希臘思想と正反對である基督の教は、忽ちにして羅馬の人心を動かし、彼等を導いて靈的な新生活に入らしめた。さしも一代を風靡した異教思想の現世主義も、基督降誕と共に衰頹の第一歩に入つたのである。之に就て名高い傳説がある。基督降誕の夜 Tarentum の岬を過ぎ行くさる旅人が、いづくともなく聞こゆる物悲しい聲、『大なるバンの神死せり』(The Great Pan is dead) といふのを聞いた。バンは云ふまでも無く希臘山野の神、その意は明かに異教思潮の滅亡を諷したのである。

詩聖 Milton が少時の作『基督降誕のあした』(On the Morning of Christ's Nativity) といふ歌にも、希臘のアポロの託宣は全くやみ、異教の多くの神々の亡び行くさまを歌つた數節がある。

The lonely mountains o'er,
And the resounding shore,
A voice of weeping heard and loud lament;
From haunted spring, and dale
Edged with poplar pale,
The parting genius is with sighing sent;
With flower-inwoven tresses torn
The nymphs in twilight shade of tangled thickets mourn.

寂しき山、波音たかき濱邊に、聲たからかに泣きさけぶを聞く。住みなれし泉より、また白楊の並木の谷間より、嘆きつつも神は去る。花の髪かさり振り亂したる女神ニムフ、くさむらのお暗きかげに悲めり。

近代の詩人では Browning^{ブラウニング} 夫人の作『死したるパン』^{『The Dead Pan』}にこの異教滅亡のことを歌つた美しい句がある。冒頭の一節に、

Gods of Hellas, gods of Hellas,
Can ye listen in your silence?
Can your mystic voices tell us
Where ye hide? In floating islands,
With a wind that evermore
Keeps you out of sight of shore?

Pan, Pan is dead.

希臘の神々よ、沈黙のうちにてなむち聞くことを得るや。また爾が不思議の聲は爾がいつくに隠るるやを吾等に語るを得るや。風吹き荒びて、とこしへに岸を見ることなき浮島に在りや。パンよ、パンは死したり

「パンは死したり」の句がこの詩の毎節の折返し^{リフレイン}になつてゐる。左の一節の如きには、更にそれがいくたびも繰返へされてゐる。

And that dismal cry rose slowly
And sank slowly through the air,
Full of spirit's melancholy
And eternity's despair!
And they heard the words it said—
PAN IS DEAD—GREAT PAN IS DEAD—

PAN, PAN IS DEAD.

また物悲しきその聲は静かに起り、静かに空中に消えたり。心の鬱憂と、とこしへの絶望とに満ちて。かれ等はその言葉を聞けり。パンは死したり。——大なるパンは死したり。

しかしながら、欧州文明の最初から、其基礎となつて殆むど幾百年間勢力を占め、人間の自然のままな肉欲の欲求に基いた希臘思潮の事だから、如何に基督教の力を以てしても、さうく右から左に滅ばされるものでは無かつた。即ち紀元後二三世紀

の間、歴史家が所謂歴山府時代は、異教對基督教、希臘主義對希伯來主義、現世主義對天國主義の衝突、換言すれば肉に對する靈の抗争時代であつた。之を文藝史上の言葉で云へば、古典時代より浪漫的の中世へ遷らうとする、人文史上最も興味ある過渡期であつた。(Constantine 大帝が基督教を以て國教と定めたのは、紀元三三四年のことである)。

最もよく此過渡時代の思想界を代表した人物、二大思潮衝突の渦中に捲き込まれて遂に慘憺たる最後を遂げた悲劇的人物は、羅馬の皇帝「背教者ジュリアン」Julian the Apostate (紀元三六一年—三六三年在位)であつた。まだ歳のゆかないうちから哲學的な思索に耽つた人で、當時漸く勢力を得た基督教に對しては夙に反

感を抱いてゐた。いよいよ帝位に上ぼつて後は、遂に堂々と異教信仰と希臘諸神の復活を首唱し、靈的なる基督教主義に對して迫害をさへ加ふるに至つたのである。だから當時の基督教徒の記録には、ジュリアン皇帝のことを極重悪人のやうに云つてあるが、實際かれは極めて情愛の深い正義の士で、また清淨潔白な人であつた。唯だ時運の大勢如何ともすべからずして、遂に悲劇的最後を遂ぐるに至つたのである。

思想史上極めて興味ふかきこの皇帝ジュリアンの事績を題目として、夫れによつて靈肉闘争、希臘思想對希伯來思想の問題を取扱つた作家がある。近代の文藝に於てその最も著るしき者を云へば、露西亞の Merejkowski と諾威の Ibsen とである。

イブセンの初期の作品中に、『皇帝とガリレア人』(Kysær og Galæer 英譯 Emperor and Galilean) といふのがある。やはり散文劇で、かれの作中で一番長たらしい物だ。イブセン自ら、自分の世界観、自分の内的経験を此主人公ジュリアンといふ人物のうちに現はしたとさへ告白してゐる。此作は前後二部に分れ、前篇は「皇帝の背教」Caesar's Apostasy と題して、最初まだジュリアンが基督教信者であつた頃に筆を起して、其後の信仰動搖の時代が描かれてゐる。古き希臘思想の美は既に滅びようとして、しかも基督教の新信仰もまた彼を安むせしむるに足らない。煩悶の結果、かれもまた *Enfant* がしたやうに、學藝に赴き哲學に走つて遂に安住の地を得なかつた。が遂に彼は神祕家 *Maximos* の教に動

かされ、魔法を信じて遂に希臘多神教の復活をはかるに至つたのみならず色々な周囲の事情は、彼をして益々ガリレア人即ち基督教信者に對する悪感を深からしめるのである。後篇は「皇帝ジュリアン」The Emperor Julian と題して、かれが君斯土堡に即位して以後にやつた基督教迫害の時の話で、最後に波斯遠征の軍中に傷いてジュリアンが陣歿する所で終つてゐる。臨終に際して、ジュリアンは遂に空中に大きく現はれた基督のみすがたを仰ぎ見た。そして『ガリレア人、爾は勝てり』といふのが、彼の最後の言葉であつた。(「爾は勝てり、ガリレア人」Victis Galilæe. といふこの言葉傳で、決して歴史的事實ではない。)

イブセン嘗つて羅馬の古都を逍遙して、古代異教文明の遺跡

を尋ね、希臘羅馬の盛時を想ふて感慨禁せず、乃ち筆を執つてこの一篇を草したと傳へられて居る。人文發達の幼年期であつた希臘異教思想の時代から、進むでその青年期とも云ふべきガリヤ人の基督教時代に入つて、肉の帝國は靈の帝國となつた。イブセンの意は更に進むで、第三帝國の建設を理想としたのである。即ち靈肉合一の理想境の出現こそ、かれの切に望むだところのものである。「皇帝ジュリアン」第三齣の終の方に、皇帝とその友マクシモスとの間の下の對話は、イブセンの理想たる第三帝國の意を示したものと、特に注意すべきだと思ふ。

ジュリアン どうだ、君、皇帝がガリヤ人か、どちらが果して勝利者になるのだらう？
マクシモス 皇帝もガリヤ人も、兩方とも屈して仕舞ひますよ。

ジュリアン 屈するつて？ 兩方とも？
マクシモス 兩方ともにです、今日だか或は幾百年の後にだか、それは分らんです。が、とにかく本當の人物が出さへすれば、兩方とも屈してしまふんです。

ジュリアン 本當の人物つて誰のことだ
マクシモス 皇帝もガリヤ人も、兩方ともに併呑して了ふ人物。
ジュリアン 君は謎を解くに謎を以てするんだから、なほさら分らない。
マクシモス まあお聞きなさい、私は兩方が共に屈すると云ふんです。決してあなたが滅亡してしまふと云ふのでは無いのですよ。幼年が屈して青年になり、青年が大人になるぢやないのですか。しかしそれで幼年も青年も滅びるのではないのです。あなたは、以前三つの帝國に就て、私が Eplusias でお話ししたのを、お忘れになりましたか。
ジュリアン あれからは随分もう年も経つたから、もう一度話したまへ。
マクシモス 私はあなたの皇帝としての政策には甚だ不賛成です。あなたは青年をつかまへて無理にでも、一度幼年になれと云ふんです。あなたに復讐の希望を指す。いかに肉の帝國は靈の帝國に吸取されて了つたのです。が、靈の帝國に對する基督教の、さりとて靈の帝國が終極のものでは無いのです。

それはちやうど青年が青年で終る者でないのと同じです。あなたは青年の發育を妨げて、一人前の大人になるのを邪魔しようといふのです。肉肉の意の出現を妨。あなたは未來といふものを毀してかかるんです。即ち靈肉兩面の性質を具へた第三帝國に對して刃を向ける事になるのです。

露西亞の文豪メレジコウスキイも、嘗て杖を小亞細亞、希臘に曳き、雅典に入つてはParthenon 殿堂のあとをたづね、去つて君士都堡の古都に St. Sophia の寺院を訪ふた。到るところ古代文化の美を讚嘆するの餘り、かれは其印象を材として、遂に三部曲『基督と反基督』“Christ and Antichrist”の制作を思ひ立つた。心を潜めて歐洲人文發展のあとを研究したる結果、かれは其根底に横たはれる異教對基督教の二大思潮の鬭争に目を付けた。また基督教の「神の性質を有つた人」God-Man の理想と、希臘の「人の性

を有つた神」Man-God の理想との二元的對照をも認めたのである。そして其三部作の第一卷に取つた題目が、即ち背教者ジュリアン皇帝の異教復活の事蹟で、歴史小説『群神死滅』“The Death of Gods”と題する名作が即ち夫れで、結構の雄大と描寫の精巧は云はずもがな、この異教最後の戰士の悲壯なる生涯を遺憾なく紙上に活躍し得たものである。之は既に日本譯も出來てゐることだから、私がかゝに絮説する迄もなからう。

ひとしく羅馬帝政末期の暗潮が生み出した悲劇的人物で、Papia といふ名高い女があつた。史實はギボンの羅馬衰亡史論にも詳しく出てゐるが、之を題目にして一篇の歴史小説を編み、希臘思想對基督教の衝突時代を描いたのが、英國十九世紀の大

作家 Charles Kingsley である。舞臺は紀元五世紀ごろの歴山府、人物は當時横暴残忍を極めた基督教僧侶と、才色兼備の、そして徳望一世に高き女性ハイベシア。

紀元後三世紀のころから起つた新プラトオン學派 Neo-Platonism は、希臘思想を綜合して、その最後の哲學組織を試み、古代の多神教を復活しようとする思想界の活動であつた。ハイベシアは即ち此派の哲學者で、辯舌に巧みなのみか、數學のような學問にさへ精しかつた。美しい一女性の身を以て、彼女は實に當時の異教思想の代表者であり、希臘宗教の最後の宣傳者であつた。教を乞ふもの門前市をなすといふ風で、之がまた妙からずその頃埃及布教中の基督教僧侶の癢に障つたのである。

當時の歴山府は實に東西文化の中心であつた。従て希臘人埃及人羅馬人は云ふに及ばず、北方の Gothic 人も大勢這入つて來た。人種の異ると共に宗教もさまざまで、勢ひその間には葛藤もあり軋轢も甚しかつた。いつの世にもある野心を逞ふする政治家、僧 OPINION を筆頭に澤山の暴慢な基督教徒、それにこの才女ハイベシアを旗頭にしてゐる哲學者の一群など、互に甚しく勢力を争つたものである。作者キングスレイが描いた悲惨なハイベシアの殺害こそ、即ち希臘思想が希伯來思想に壓側される最後をあらはしたのだ。ハイベシアが殺される少し前のこと、彼女はひどく苦悶してゐたが、そこへ猶太人の巫女で Miriam といふ魔法使の婆がやつて來た。そしていろいろ慰めるような嘲る

よくな事をいふのに對して、ハイペシアは、自分の哲學でも遂に安心が得られないから、何とかして呉れないかと云ふ。新プラトオン派の哲學も、恚ういふ風ではもう全く力を失つてゐるのであつた。すると間もなく、街には基督教徒の暴徒が、ハイペシアを *Caesarem* にある教會へ引づり出して、殺してしまふ。その殺しかたがまた如何にも殘忍酷薄を極めたもので、即ちこの美女を眞裸にしてしまつて、四肢五躰を切り離し、牡蠣の貝殻で骨に附いた肉を掻き取つたのである。かうして古代希臘の思想は、其の美しい女の殉教者であつたハイペシアの悲劇を最後の幕として、全く勢力を失墜した。

(因みにキングスレイの此名作は、當時ゴス人など北歐蠻族が、

南歐文化の民を征服した歴史を語るものだとも解釋される。即ち前者の剛健素朴の風が、爛熟した花やかな羅馬の文明を壓倒した當時の有様を描いたものだとも見ても、甚だ興味が深い。北歐對南歐の問題は、基督教對異教の問題と聯關して、いつも吾々の注意を惹くからである。

序に、當時思想界の中心であつた哲學に就て一言しよう。元來 *Aristoteles* 以後になると、希臘の哲學思想は *Epicurus* の快樂主義にせよ、また懷疑學派にせよ、みな既に靈肉の衝突不調和の傾向をあらはしてゐた。古代の人は心身の健全なる發達によつて、地上生活のうちに安心立命の地が得られるものと確信してゐた。それが次第に深く自己を内觀し反省するに及んで、自分の生活

に矛盾があり、分裂のあることに氣付いた。理想と現實の背反、神性と獸性との不調和を自覺した。即ち肉體σῶμαはあらゆる惡の源であつて、また靈の墳墓μνημειαである。だから吾々人間はこの肉の生活を解脱して、清淨無垢の心靈生活に入らねばならぬと、哲學者たちは説いたのである。それには到底自力のみでは出來ないから、神を禮拜して其力を仰ぐの外はないといふので、哲學が漸く出世間的宗教的色彩を帯びるようになったのは、此頃からである。そしてそれが遂に純然たる哲學者の宗教となつて、出來たのが新プラトオン派の教であつた。そしてさきに述べたように、是が即ち希臘思想掉尾の運動でもあり、また基督教の當の敵となつた多神教哲學であつた。

希臘思想の根本は現實主義であつた。従つて數ある希臘哲學者の説のうちで、夙に肉の繫縛を脱した高遠の理想境を説いたものと云へば、先づプラトオンの形而上哲學である。今や人々が自己の内部生活を反省し、外物の頼みがたく、物欲の云ふに足らざるを、しみじみと感ずる宗教的慾求の時代に入つたので、勢ひこのプラトオンの理想説が頓に有力となり、時代精神の根底をなすようになったのである。即ちプラトオンの形而上論に神祕的宗教的色彩を施して、ちやうど印度古代の佛教のように、哲學のようでもあり宗教のようでもある中途半端なものを拵へて、當代民心の要求に應じようとしたのが、即ち新プラトオン派で、其代表者は即ち Πλωτῖνος Plotinus (紀二〇四年生、二七〇年死)であ

つた。古代から中世への橋渡としても、此ニオプラトニズムの思想ぐらゐる思潮史の研究者に取つて興味ふかき者はなからう。プロテイエスの説は發生論即ち Emanationslehre である。天地間には一の根本になる力があつて、森羅萬象すべて皆これから發生すと説くのである。そして此根本たるものは全く現象界を超越し、吾々が見ることを得ず形容することも出来ない至高至大の力であつて、之が即ち神である。この神から發生したものが精神 *Geist* で、これが高い方と低い方との二つに分れる。前者は永遠不滅の理想を有し、天地を貫くところの靈である。これに對して後者即ち低い方の精神は、常に肉に結ばれ、物質と形骸に縛られてゐる。そして此精神に次で、も一つ下位にある者が

即ち物質であつて、之が最も不完全なもの、また無常なもの、世界一切の惡は皆これから起るのである。だから色相界を超越し形骸を解脱することによつて、吾々は遂に神の生活に合することを得るのだ。

恁ういふ風にプロテイエスの哲學では、官能の世界即ち物質を蔑む^{さいむ}だが、一方に於ては宇宙の一大靈氣たる精神が此物質界に現はれて、そこに始めて天地萬象の美が生ずるのだと説いた。肉を賤^{さい}しみながらも、なほ一方に於て、その美と調和と秩序とを嘆賞し、之を以て天地間の一大靈氣が物質界に現はれたのだと見た點は、後に説くべき基督教思想が、現世を惡魔の穢土だと觀たのと全く正反對で、プロテイエスが明かに、なほ希臘思

潮の特色を失つてゐなかつた事を示してゐる。このプロテイエスが物質即ち肉の美を説いた事は、今や異教思想の光の消えようとする折の最後の一闪とも見るべきであつた。

プロテイエス以後になつて、新プラトオン派の哲學は、益々濃厚なる宗教的色彩を帯びるに至つた。即ち物質界を離れて眞如の世界に入らうといふには、神の力にたよつて禮拜修行を行ひ、一切の物慾を絶たねばならぬと説き、その爲めには古代の神々を頼むで来て、一大多神教を作らうとしたのがある(さきに述べた皇帝ジュリアンの如きが即ちそれであつた)。恚うして靈肉の争は益々人々の心を煩悶させて、それが遂に基督教のために破られるに至つたのである。

「かくて時代の思潮は流れ／＼と、智識と哲學と藝術との時代を去り、宗教信仰の時代に這入つた。人の心は現實より理想へ、肉より靈へと移つて行つた。同時に歴史の軸は廻轉して、古代は中世となつたのである。」

獨乙の大詩人は世界人文發展の四期“Die vier Weltalter”を歌つて、異教文明から基督教時代に變つて行くこの轉機を下のやうに云つた。

Die Götter sanken vom Himmelsthron,

Es stürzten die herrlichen Säulen,

Und geboren wurde der Jungfrau Sohn,

Die Gebrechen der Erde zu heilen;

Verbannt ward der Sinne flüchtige Lust,

Und der Mensch griff denkend in seine Brust.

第二 思潮史の回顧(古代)

文藝思潮論

Und der eitle, der tüppige Reiz entwich,
Der die frohe Jugendwelt zieret;
Der Mönch und die Nonne zergesselten sich,
Und der eiserne Ritter turnierte.
Doch war das Leben auch finster und wild,
So blieb doch die Liebe lieblich und mild.

—Schiller, *Die vier Walküren*.

異教の神々は(オリムパスの)高御座より下り、壯麗なる宮柱もたふれぬ。地上の缺陷を癒やさんとて、(マリア)永貞童女は神子を生みたまへり。かくて官能の慾は追ひ拂はれ、人は思ひに沈みて、おのが胸を抱きぬ。
歡樂のわかき世界を飾りたる、空なる、みだらなる(肉の)興奮は通れ去れり。世は僧尼の難行苦行と、騎士の仕合ひとのみ。かくて生活は陰鬱荒涼たれども、愛のみはなほ美しくおだやかなりき。(シルレル「世界の四期」)

第三 思潮史の回顧(中世)

戦國時代と通世主義——宗教的禁欲主義——
肉を虐ぐること——聖フランシス上人——智
識の禁歴——中世の哲學——かくれたる異教
思潮の勢力——中世傳説、ファウスト——藝
術的要求——ハイネの「流論の神々」——
「カルミナ、ブラナ」——ヘイタアの所説

If the Christian life is one of observances, if freedom from sin is to be secured by penance and by fleeing from temptations, then the holiest life will be secured by abandoning the world entirely, and either alone, in solitude, or in company with a few others like minded, giving one's self wholly up to penances, and mortifications of the flesh, and pious observances. The more external and formal the religious life became, the stronger became the tendency toward the ascetic and monastic ideal.

—Adams, *Civilization during the Middle Ages*, P. 131.

第三 思潮史の回顧(中世)

文藝思潮論

基督教生活が若し戒律を守るの生活ならば、また罪を免るるは苦行をなし誘惑を遁るるに在りとせば、全く現世を捨つることによつて、ここに最も神聖なる生活は得らるべし。或は單獨に、或はまた同氣相求むる他の人々と共に、苦行に身を捧げ、肉を虐げ、戒律を守るべきなり。かくて宗教生活が外面的形式的なるに従つて、禁欲遁世の理想に對する傾向は益々強くなれるなり。(アダムス著「中世文明論」一三一頁)

西羅馬帝國滅亡(西曆四百七十六年)よりの約千年間の歐州は、基督教思想の全盛期。歴史家が所謂中世暗黒の時代である。

大帝國が滅びて統一者のなくなつたあとは、勢ひ群雄割據の戰國時代になる。平和の時代には、歡樂の美酒に酔ふてすべてを忘れた人たちも、ひとたび戰亂の世となれば、忽ら現世の幸福をはかなみ、有爲轉變の世のさまを觀じて、ひたすら墓のあ

なたの天國をのみ祈願する。おのづから厭世的悲觀的ならざるを得ない。我國の鎌倉時代に厭世的佛教の盛になつたと同じわけで、所謂「羅馬の平和」Pax Romanaの亡むだあとは、節慾苦行の生活と遁世主義 monasticism とを中心とした基督教が勢力を逞ふするに至つたのは、まことに當然の成行きである。

紀元二三世紀の頃から、既に自我的本能主義の異教思潮に對する反動として現はれたこの宗教的禁慾主義 Religious asceticism は、詳しく云へば、智識の禁壓と快樂の否定との二つであつた。

現世の生活は、當時の僧侶の言葉でいふと、試驗の状態に在るので、吾々は此世で抑損難行苦行をつづけ、それによつて來世の安樂と幸福とを得るのである。また美は陷穽であり、一切

の快樂は惡魔の誘惑である。吾々は唯だこの誘惑に打勝つことによつてのみ、眞に神の救済を得るのだと説かれた。現在の生命の力や要求を極端に虐げ、靈的生活のために肉的生活を全然壓服しようとした點に於て、日本の或る時代の佛教思想をおもはせるものがある。一休といふ坊主が、杖のさきに鬮體をつけて、現世の享樂のはかなきを教へて歩いたやうに、中世の基督教僧侶も亦た、腐つた死骸と蛇と蛆蟲とで満ちた骨堂チャペルを開けて見せて、人生はこの通りだよと善男善女に説いて聞かせたものだ。

中世の宗教がいかに甚しく肉を虐げたかは、當時の高僧聖フランシス上人 *St. Francis of Assisi* の一代記を讀むただけでもわか

る。上人はもと相當な家柄に生れながら、身には縋縷を纏うふて乞食のやうな生活を送り、諸國を流浪し、到るところに神の道を説き貧者を救ふた。遂に親戚故舊はもとより、父からも見放されたのを幸ひ、神を唯一の父として、益々教法のために盡した。清淨チャムティテ、服従オベディエンス、清貧ポウアテイの三つを根本にして、飽くまでも自我と肉的生活とを否定した。夜も眠らず斷食をして、日に三たびわれとわが身を鐵の鎖で鞭打つた。食物に興味を感じないように、わざ／＼灰をなかに混ぜて食つたとさへ傳へられてゐる。憊うしてかれはフランシスカン派の宗祖となつたのである。すべての美と快樂は皆ことごとく、現世に至つて、人を誘ふ陷穽であると云つて、或る坊さんなどは美しい瑞西の山のなか

を旅するのに、山水の美に目を觸れないやうにと、決して左右を見なかつたといふ有名な話も傳へられてゐる。之をかの美的享樂を以て中心とした希臘思想に較べると、眞に千里の差ではないか。

次に智識の禁壓に至つては更に甚しい。折角希臘羅馬の異教時代に進むでゐた學藝の研究は全く禁壓せられ、一世を擧げて無智文盲の愚民の世界と化した。個人に自由もなければ自覺もなかつた。唯だもう一向専念に神を祈願すればそれで救はれる。無學文盲こそ信仰の母だと云つて、法王の暴威のもとに、遂には聖書をすらも讀むことを禁じた。民を愚にする法としては確かに秦の始皇の坑書などよりも、なほ一步を進めたややかたで

あつた。無智朦昧の徒の迷信につけ込むで、^{レリククス}聖骨や^{アイユレット}呪符や、そのほか色々の^{talismans}talismansを賣つて巧みに世を欺き、むかし耶穌の説いた教とは似ても似つかぬ基督教を説く坊主ばかりが多かつた。それらは先づ兎に角としても、歐州中世史上の最大事件であるあの前後八回の十字軍といふ馬鹿々々しい騒ぎを考へて見ただけでも、當時のことは大抵推測せられるではないか。

また思想界の指導者であるべき筈の哲學が、當時は全く基督教の御用哲學であつた。即ち中世のスコラ哲學は、その名の示す如く基督教僧侶を養成する學林即ち^{schola}scholaから出た説である。だから哲學者とは云ふものの、純なる眞理の探求者ではなくして、つまり教法の學者^{Doctores ecclesiae}Doctores ecclesiaeに過ぎなかつた。基督教

の説くところに都合のよさうな理窟をつけて、うまく信仰と道理との調和を謀つて行けばそれでよかつたのである。之を以てかの學術的であり智識本位であつた古代の希臘哲學に比するならば、眞に驚くべき變化であつた。獨斷主義ドグマティスムと形式主義フォーリスムと、これを除けば中世哲學は零ゼロであつた。

以上は普通にどの歴史の本にでも説明されてゐる話だが、ここに一つ特に思潮史の研究者に取つて最も興味ある現象があつた。それは恚ういふ禁慾主義萬能の世界に於てすら、なほ人間自然の本能の欲求に根ざした異教的現世主義が、隠然動かすべからざる潜勢力を有してゐたといふ事實である。禁慾節制を旨とした宗教生活の僧院の奥深くからは、藝術と歡樂を求め聲

が、たとひかすかながらも絶えず洩れてゐたのである。この反基督教的氣分が種々さまざまに姿を變じて、落莫たる中世思想の半面に美しい詩を飾つたといふ事は、藝術史の研究者に取つて此上もなき興味ある問題であるが、いま試みにその例證となる二三の事實を挙げやう。

先づ第一に挙げらるべきものは、かの豊富なる中世傳説である。これが近代浪漫派の文藝に如何に有力な詩材を供給したかは、讀者の既に知らるる通りであらう。たとへば、初めは英國の Marlowe 次では西班牙の Calderon 等によつて戯曲化され、後遂にゲーテの大作となつて、全世界に知られたかの Faust 傳説の如き、是れ全く中世異教思想の變形に外ならないのである。

概して當時の悪魔とか魔法とかいふ觀念は、疑もなく反基督的思想の權化ともいふべき性質のものだが、その中に甚しく詩的な滑稽なまた狂的な分子の多いことを、私などは非常に面白く思ふので、Mephistopheles は即ちその最も著るしきもの、徹頭徹尾これ破壊思想、懷疑的態度、乃至異教の氣分を人格化したものに外ならない。(序ながら、近代に於てバイロン等の文學を魔王派 Satanic School といひ、更に後の Baudelaire 一派の詩文を悪魔派 Diabolists の名によつて呼び、その反基督的、反道德的、或は肉體的官能的藝術たるの意味をあらはすのも、畢竟同じ異教的傾向を示すの意に外ならぬ)

こゝを書くとき、ふと私は嘗てマアロウの古曲『ファウスタス

博士』“Doctor Faustus”に、下のやうな一節を讀むだことを想ひ起すのである。ファウスタの心のうちで二つの聲が耳語いてゐる。その一つは神のおん許へと彼を呼ぶ聲であるが、他の一つはそれと反對に「神はお前などを愛しやしない、お前自分の意志、それが即ちお前の神であらう、そしてそれは地獄の與へるものを欲しがつてゐる」といふ。また善の精と惡の精とが現はれて、一は天國を示し、他は現世の歡樂を説いて、ファウスタを誘はうとしたが、その結果かれは遂に幾人かの女に關係するようになつたと云ふところがある。これなども矢張り、靈肉兩生活の不調和から來る中世の人の煩悶を寫したものだと思ふの外は無からう。

またもつと面白い事には、異教的藝術的氣分が、當時の基督教そのもののうちに色々現はれてゐた事である。たとへば畫像にある基督のすがたが、古代希臘の美しい牧羊者のそれになつてゐたり、或はむかしの異教徒の祭典をその儘宗教の儀式禮拜に用ひてゐたなどは、當時の人が表面だけは飽くまでも靈的宗教的でありながら、實は肉體美を讚し歡樂を求むる熱意を洩らしたものに外ならなかつた。そのほか南佛地方に出た Troubadours の詩人が地上の歡樂を頌し、燃ゆるような戀を歌ふた名高い叙情詩の類、または Aucassin と Nicolette の美しい戀物語、近世に至つて Wagner の樂劇をはじめ、多くの詩人が材料に使つた Tristan と Isolde 或は Tannhäuser の傳説、また羅馬の大詩人 Virgil が當

時は魔術師として傳へられてゐた話、美と愛の女神がかくれてゐたヴィナス山 Venusberg の傳説(詩人 Swinburne の名作『ヴィナスの讚美』Laus Veneris 参照)昔の Troy の Hector や Helen の物語、これ等は悉く皆當時の禁慾的宗教の領域を離れて、別にその背後に潜むてゐたゆたかな藝術的氣分の所産であつた。

また獨乙の詩人 Heine の散文集に、『流謫の神々』(Die Götter im Exil)と題した一篇がある。紀元三世紀のころ基督教の全盛と共に全く力を失つて、ひそかに山野を落ち延び、果敢ない流竄の身となつた希臘の神々がその後のさまを面白く書いた物、中世傳説に於ける美しい異教的藝術的分子の存在が、ここにも窺はれるのである。中世になつてからは、古代の神々はいろ／＼に

姿を扮して、遠く埃及に逃れ、そこでは動物に早變りして隠れてゐたのも多かつた。或は商賣人に化けてゐたのもあつた。獨乙の森林に樵夫となつて雇はれ、もう神酒は飲めず麥酒ばかり飲むでゐたと云ふやうな神様もあつた。なかでも祖神アポロの話がおもしろい。アポロは牧羊者になつて、埃太利の山間に隠れてゐたのであるが、いつも好い聲で美しい歌を歌ふものだから、遂に或る學問のある坊主からその正體を嗅ぎ付けられた。これは何でも異教の神々にちがひないと云ふので、法廷に引き出され、嚴しい拷問にかけられた。アポロも仕方なしに遂に實を白狀した。いよく刑に處せられようといふ時、せめて今生の思ひ出にいま一曲を弾じ、美しい歌を歌つて見たいと頼むだ。

するとアポロの聲のすぐれて美しいばかりでなく、けだかい眉目清秀の美男であるのに、今まで唯だもううつとりと聞き惚れてゐた女人どもが俄に泣き出して、遂には皆が病人になつて了つた。何でもあれはvampireであるに違ひないといふので、目を經てからアポロの墓を發いた。死骸に棒杭を突きささしさへすれば、女どもの病は癒るだらうといふので、さて掘つて見ると、墓は空であつたといふ話。これなどは特に名高い話で、先日も現代英國文壇の名家 Galsworthy の文集を讀むでゐたら、下のような一節があつた。今おもひ出したから序に書き付けておく。

"A legend runs, that driven from land to land by Christians, Apollo hid himself in Lower Austria, but those who aver they saw him there in the thirteenth century were wrong; it was to these enchanted climes, frequented only by the mountain shepherds, that he certainly came"

Galworthy, *The Inn of Tranquility*, p. 71.

しかし之等のほかにまだ、當時潜むでゐた美的享樂の思想を最もよく表はしたものがあつた。それは近世文献學の發達につれて、その道の學者が、*Bavaria* の僧院の經藏に奥深く秘められてゐたのを探り出して得た一卷の拉句詩集、題して *Carmina Burana* といふ寫本であつた。

おもむろに白髯を撫して道を説くような老人ならばいざ知らず、青春の血うちに燃えて、見るもの聞くもの、すべてが皆おのれの生活内容を豊富にするように感ぜられる廿歳あまりの若盛り、どうしてあの死灰枯木のような修道院の禁欲生活が堪えられよう。十二世紀のころ、歐羅巴大陸の諸方に散らばつて

ゐた大學をあちこちと遍歴する青年學生が肉の歡樂を歌ひ奔放の熱情を洩らして、それが遂にこの一卷におさめられたような美しい詩篇をなしたのである。この詩集は別にまだ『放浪者の歌』 *Carmina Vagorum* ともいふので、近代英國散文の大家 *John Addington Symonds* は、その一部を譯して、『酒と女と歌』 *Wine, Woman and Song* と題した。集中の歌は主として拉句語であるが、獨乙語も交つてゐる。なかには神や天國を歌つた宗教詩も、這入つてゐる。そして最も面白いことは、詩形だけは全く當時の基督教の讚歌と同一の體を用ひたことで、その怪しい不調和が特に私どもの目を惹くのである。

さて此詩集を讀むで行くと、そこに歌はれた美と戀と春とが、

いかにも強く肉感的で、燃えるやうな情熱の溢れてゐるのに誰しも驚くのである。實際あのやうな時代に恁ういふ歌が出るかとおもふだけでも、いかに生の歡樂と藝術衝動とが深く人心に根ざしてゐるかに今更のやうに私どもは呆れるのである。異教時代の美と春と愛の神 *Venus* の讚美はもとよりのこと、*Phyllis*, *Flora*, *Cacilia* といふやうな名も美しい麗人に捧げて思ひを抒へた歌、久しく忘れられてゐた希臘の *Paris* や *Helen* の名をさへ、この集のうちには屢々見るのである。

先づ女のすがたや肉體の美を歌つた句には、どうかすると近代の抒情詩でも及ばないやうな濃厚な色彩がある。百合や薔薇の美しさを頬の形容に使つて、さて「花かざりしたる額、黒き眉」

Frons nimirum coronata, supercilium nigrata といふやうな句がある。

Frons et gula, labra, mentum
Dant amoris alimentum;
Crines ejus adamavi,
Quoniam fuere flavi.

—*Carm. Bur.*, p. 231.

額、喉、唇、頭
みな戀の糧を與ふ。
かの髪をわれは愛せり、
こがれの色にてありしかば。

(之はサイモンズの英譯にないので、原詩を引用した)

サイモンズは此四行を評して、「リズムと重々しい拉句語とが、三行目から四行目へ急に移る變化と相俟つて、よく情の高調をあらはしてゐる」と云つたが、それがいかにもと肯かれる。

今は引用を省くが、酒神 *Bacchus* の讚美の歌などには、昔の希臘の詩人 *Anacreon* の快樂歌も及ばないやうな絶唱がある。ここにサイモンズの英譯のうちから、名高い數節を引用して詩風を示さう。先づ現世の讚美として、集中で一番名高い歌 “*Gaudemus igitur*” (それは吾等はよろこぶ) には、冒頭先づ

Let us live, then, and be glad

While young life's before us !

After youthful pastime had,

After old age hard and sad,

Earth will slumber o'er us

と歌つて、それから人生の幸福を願ひ、最後の二節に下の數行がある、

Live all girls ! A health to you,

Melting maids and beauteous !

Live the wives and women too

Gentle, loving, tender, true,

Good, industrious, duteous !

Perish cares that pule and pine !

Perish envious blamers !

Die the Devil, thine and mine !

Die the starch-necked Philistine !

Scoffers and defamers !

また青春は歡樂の時であるといふ意を歌つて、

Whatso'er the rest may do,

Let us then be playing :

Take the pastime that is due

While we're yet a-Maying;

I am young and young are you:

'Tis the time for playing.

—No. 37: *Phyllis*.

また女の肉體美を讚した美しい歌の一例として、『リディアに寄す』といふ歌のはじめ數節を掲げやう。この類の秀句は集中の隨處に見られるのである。

TO LYDIA

Lydia bright, thou girl more white
Than the milk of morning new,
Or young lilies in the light!
Matched with thy rose-whiteness, hue
Of red rose or white rose pales,
And the polished ivory falls,
Ivory falls.
Spread, O spread, my girl, thy hair,

Ambered hued and heavenly bright,
As fine gold or golden air!
Show, O show thy throat so white,
Throat and neck that marble fine
Over thy white breasts incline,
Breasts incline.

Life, O life thine eyes that are
Underneath those eyelids dark,
Lustrous as the evening star
'Neath the dark heaven's purple arc!
Bare, O bare thy cheeks of rose,
Dyed with Tyrian red that glows,
Red that glows.

Give, O give those lips of love
That the coral boughs eclipse;

文藝思潮論

Give sweet kisses, dove by dove,

Soft descending on my lips.

See my soul how forth she flies!

'Neath each kiss my pierced heart dies,

Pierced heart dies.

禁慾生活のために抑へられ虐げられてゐた憊ういふ藝術的本能的欲求の聲は、やがて十五六世紀に及び、遂に文藝復興となつて、人心を中世の長い眠から目ざましたのであつた。Pater は其『文藝復興期』"The Renaissance"に於て、中世のうちにあらはれてゐたこの異教的現象に就て、下のやうに云つた(原文省略)。

中世における理性と想像の發現、心の自由を主張すること、これらを名づけて余は「中世の文藝復興」と云つたが、その最

も著るしい特徴の一つは反道徳主義 antinomianism で、即ち當時の道徳宗教の觀念に反抗するの精神であつた。かれ等は官能と想像の快樂を求め、美を愛し肉體を崇拜するに當つて、全く基督教的理想の域を超脱した。之はかの、全く死むたのではなくて一時ヴァイナス山の洞にかくれてゐた希臘のヴァイナスの再來で、また色々に姿をかへて世界をあちこちとろろつく古代異教の神々の再來であつた。中世を特に「信仰の時代」として論ずる人たちは憊ういふ要素を全く無視してゐるが、この反抗の要素を認めたことが、やがて佛蘭西浪漫派の作家の中世描寫をして、暗示に富むた興奮的のものたらしめた所以で、たとへば Victor Hugo の『鐘樓守』

“Notre Dame de Paris”の一篇の如き、それだ。この要素はひとしくまた、^{アベラル}Abelardの物語、タンホイゼルの傳説にもあらはれた。

—Pater, *The Renaissance* (Macmillan's New shilling Lib. Edition), p. 26.

第四 思潮史の回顧(近世)

1 近代思想の黎明

近代思想の源泉——古學復興——異教思潮の復活——人間本位の思想——新文學の勃興——肉の美と造形藝術——各國の繪畫彫刻——ルネッサンスの年代とその歴史的意義——
【ルネッサンス】

“Thus what the word Renaissance really means is new birth to liberty—the spirit of mankind recovering consciousness and the power of self-determination, recognizing the beauty of the outer world, and of the body through art, liberating the reason in science and the conscience in religion, restoring culture to the intelligence and establishing the principle of political freedom.”—J. A. Symonds, *Renaissance in Italy: the Age of the Despots*, p. 22.

文藝復興といふ言葉の眞の意味は、自由の新しく誕生である。

第四 思潮史の回顧(近世)

人心が自覺と自己決定の力とを恢復し、外界の美を認め、藝術によつて肉體の美を認め、科學に於ては道理を、宗教に於ては良心を解放し、教化を理智の域に復歸せしめ、政治上自由の主義を確立した事である。(サイモンズ「伊太利文藝復興史論」)。

かつて肉に飽いた者が靈を求めたのとは正反對に、今や中世の暗い冷たい宗教生活に疲れ果てた人の心は、おのづからまた肉的現世的方面に向つた。そして古代希臘の美しい文明と花やかな藝術を復興しやうとした。たとひ政治史の上に何等急激な破壊や變化は無くとも、思潮の流れはおのづからその行くべき道を辿つて暗遷黙移するのである。新しい何者かを求めてやまない人心の熱烈痛切な要求、冒險進取の氣風、そこに近代思潮の源は發したのであつた。

思潮の一大轉機に臨むで、歐洲には文明史上最も注目すべき幾多の事實があらはれた。先づ西班牙にあつた亞刺比亞の文明が、希臘羅馬の學問を歐洲全體に傳播させたこと、十二世紀の頃からは、伊太利の Bologna 英國の牛津などの有名な諸大學が起つたこと、君斯士堡の陷落と共に、そこに居た東方の學者は逃れて伊太利に走り、希臘古典の研究は Florence の市長 Medici 家の保護のもとに益々盛となつたこと、また各地方の寺院の奥から古文學の斷簡零墨を漁つて、考證訓話につとめる多くの學者の出たこと、幾百年間全く顧みられなかつたホオマアや Sophocles の詩歌、アリストテレス、プラトオンの哲學を、當時の學者が心血を灑いで研究しはじめたこと、すべて之等の事實は當時の

陸地發見、航海冒險熱の流行、印刷術の發明などと共に、教課用の西洋史にすら必ず詳説されてゐる事へ、私は今煩を避けて説明を略する。

この新風潮新傾向が、遂に花々しく十五世紀の歐羅巴に成熟したのを名づけて文藝復興といひ、すべての歴史家は近代史の第一頁をそこから數へる。狹義に解すればルネサンスといふ言葉は、「新生」或は「再生」を意味するのであるから、單に異教時代即ち希臘羅馬の學藝復活に過ぎないが、實を云へば中世基督教の因襲や權威を破つて、今や人心が個人的に覺醒したことを意味するのである。自然を重むじ自由を貴ぶ異教思潮の再起である。天國の幸福を祈願するよりも、人は先づ現在人生の享樂を求め

やうとする。ながらく法王の暴威のもとに禁歴せられた智識の要求は、今や其桎梏を脱して、學藝の自由討究に多年の渴を醫したのである。この時代に名高いかの Kepler や Galileo や Copernicus などの星學物理学上の大發見は、即ち批評的實驗科學の精神が、獨斷的宗教信仰に代つたので、これが即ち近代思想の源であると共に、また一面に於て、古代希臘の學藝の復活に他ならないのである。(おもへば現代の科學と宗教との衝突、智識と信仰との不調和が、この文藝復興期の希臘主義對基督教思想の衝突に、源を發してゐることに注意せねばならぬ)。顧みれば、古代の異教文明滅びてより殆むど一千年、その間、半未開の暗黒状態に葬られてゐた歐羅巴に、今やこの美しい新時代の曙光

は現はれたのである。かくして、今までは全く獨斷的宗教の奴隸であつた藝術や學問が、近代的精神の眞髓である自由と獨立とを得たので、南歐伊太利こそ、即ちこの異教思潮復活の新氣運の發源地であつた。

中世の間は一意専念に神や天國をのみ祈つて、人は全く自我といふものを忘れてゐた。それが今や人心の覺醒に促がされ、古代希臘の「なむち自らを知れ」といふ態度に歸つたのである。神本位の思想は滅びて、人間本位の思想が之に代つた。ちやうど當時の閣龍^{コロンバ}等の陸地發見と同じやうに、つまり今まで忘れられてゐた「人」といふ者を新に發見したのであるから、文藝復興期の思想は、一にまた人間主義即ち humanism の名を以て呼ばれるの

である。これを學藝の上から云へば、今までの宗教家が「神の智識」divinarum rerum cognitio をのみ重むじたに對し、新しい學者は「人間の記録」littere humaniores を研究するものであつた。サイモンズはその大著『伊太利文藝復興史』に、「文藝復興の大業は、世界の發見と人間の發見となりき」[The great achievements of the Renaissance were the discovery of the world and the discovery of man] と云ひ、また

「文藝復興史は藝術や科學や文學の歴史ではない、また國民の歴史でもない。それは歐洲民族のうちにあはれた人間精神の自覺的自由に到達した歴史である」[The history of the Renaissance is not the history of arts, or of sciences, or of literature, or even of nations. It is the history of the attainment of self-conscious freedom by the human spirit manifested in the European races.—The Age of the Despots. p. 3.]

基督教文明に對する異教文明の勝利、また靈に對する肉の復活、宗教に對する藝術の復興であつたこの新思潮は、先づ南方

伊太利の沃野に派手やかな文藝の花を咲かせた。遠く先づ Dante が『神曲』"Divine Comedy" はいふまでもなく、Petrarca が情熱をあめた小曲や、Boccaccio の美しい散文の物語によつて、當時の伊太利文學は千古に誇るべき不朽の大作を得た。この三人は共に美しい戀愛をもとにして、そこに新しい人生の意味を求めやうとした。また佛蘭西の方を見れば、Rabelais の諷刺諧謔も、Montaigne の論集も、この時代の産物である。Ronsard 一派の抒情詩人が佛蘭西の新しい國語や文學のもとをなしたのも、同じくこの時である。西班牙文學では、このあひだ日本の文藝委員會が翻譯を企てた Cervantes の名作 "Don Quixote" を示し、Calderon の名高い戯曲もこの折に出來た。英吉利文學では豪放卓落の天才マ

アロウの劇詩となり、Spenser の『仙女王』"Faerie Queene" となり、また遂に大沙翁の戯曲となつたのである。更にこれを詩文以外、他の繪畫彫刻等に就て考へて見ても、文藝復興は實に歐洲近代藝術の黎明期であつた。十二世紀ごろから後になると、佛蘭西にも獨乙にも伊太利にも、常に畫家や彫刻家が居つたが、その作品には、古代希臘の藝術に見られるやうな美といふものが無かつた。むしろ幼稚な不完全な、怪異不可思議ともいふべき作ばかりであつた。顔面には随分活氣もあり、人を動かすやうな表情もあつたが、からだの方は全く均齊の美を缺いた。手足ばかり無闇に細長い、釣合ひの惡るい實に變挺なものであつた。それにまた遠近法なども全く無茶苦茶

であつた。(後になつて出た近代浪漫派の藝術は、却つて昔の恣ういふ奇抜な怪異な藝術を喜むたのであるが、それは別問題だ) この風を一新して、眞に整つた美しい作品を出し、裸體にした本當の肉の美を研究するやうになつたのが、即ち文藝復興以後の藝術である。

またさきにも述べた如く、中世は一切の學問藝術をして宗教信仰に服従せしめた時代である。だから繪畫なども全く神聖な謂はば抹香くさい教訓的宗教的性質のものばかりで、美とか快樂とかいふ分子は、毫も見られなかつた。それを一變したものが即ち當時の伊太利の畫聖 Raphael で、かれがまだ二十五歳の春に、^{Vatican} の宮殿に畫いた壁畫こそ、實にこの繪畫史上に一新

時期を劃したものであつた。即ち在來の宗教趣味が一變して、ここに眞の藝術美を本位とした新畫風があらはれやうとする其轉機を代表する者であつた。そして之を眞に自然に歸らしめたものは、かれと同時代の巨匠 Leonardo da Vinci が曠世の奇才であつた。かのベイタアの『文藝復興』には、下のやうに云つてある(原文省略)。

「十五世紀の運動は二重になつてゐた、即ちなかばは復古、なかばは所謂「近代精神」の勃興で、それには現實主義と經驗に訴へることが伴つてゐる。古代に歸ることと自然に歸ることとの二つが含まれてゐる。ラファエルは前者を、レオナルドは後者を代表する。」

—The Renaissance (Macmillan's New Shilling Lib. edition), p. 113.

當時伊太利のほか、西班牙には Velasquez, Ribera, Murillo などが出た。殊にゴラスケズの畫などは、十九世紀の印象派にさへ影

響を及ぼして、近頃では最も持囃される古名家の一人である。また弗羅曼の方では、Rubens 一派の名作がある。たとひ宗教や古代神話に題目を取った畫であつても、顔面といひ身體といひ、全く以前の宗教畫の風ではなく、肉付きのいい血色の美しい白皙紅顏の弗羅曼人特有の相貌をるがくのが此派の特色であつた。また此弗羅曼派に對して和蘭派の方には、Rembrandt があつた。かれが近代の風景畫と風俗畫との始祖であることは、今更らふ迄もなからう。

彫刻では十五世紀のなかごろに Donatello が出たが、次でまた Michelangelo に至つて、筋肉骨格の美を研究し、その大作に遺憾なく新時代の精神を發揮し、靈肉合一の思想が生むだ大藝術を

成したのである。

一口に文藝復興と云つても、必ずしも歐洲各國に同時に起つた現象ではない。従つて嚴密にその年代を定めることは出来ないが、先づ十四世紀の中葉から十六世紀にわたつた色々の新運動の總稱と見てよからう。伊太利は最も早く、和蘭は最も遅れて、十七世紀にこの新精神の勃興を見た。そして北歐スカンデナヴィアと獨乙北部とは、遂にこの運動に與らずして、近頃まで蒙昧暗黒の別天地にあつたことは特に注意すべき現象である。享樂耽美の風潮、靈と肉とを調和せむとする努力、人心の個人主義的覺醒、肉的本能生活の肯定、獨斷と權威とを排する批評的精神、——すべて之等を一言にして云へば希臘主義の復活

が、この近代思想の黎明期を最もあざやかに色づけたものであつた。

(昨年の秋、京都の文藝講座で、私が思潮論のこのあたりを説いてゐたとき、ちやうど其二三日前に、大阪の劇場で藝術座が演じたマアテルリンクの「モンナ・ヴァナ」Monna Vannaを見たので、それに就て下のやうな事を語つた。おもへば十年の昔、まだ私が大學の學生であつたころ、英國の検閲官がこの劇の上場を禁じたのに對して、當時あの國の第一流の詩人や作家が殆むど總出で、連署をしてその不當を詰つた抗議の文を、英國の或る文學雜誌で見た。そしてその頃出來てゐた英譯を早速先輩から借りて讀むだ。いかにも因襲道徳を無視した點に於て、英國の官憲には確かに shocking に思はれさうな作だと知つた。しかしそれよりも私の先づ感じたのは、此劇がマアテルリンク初期の作のやうな純然たる神秘劇ではなくて、氣分や情調よりも寧ろ一種の思想を暗示するものだといふ點である。先づ第一この作者の初期の劇には、人物にせよ事件にせよ、ただ漠然たる神秘の空氣に包まれて、何時この話だとも限定してないのが普通であつたが、この「モンナ・ヴァナ」は、明かに十五世紀文藝復興

興期の伊太利で、フィレンツェ、ピサの市府の戦であることが示してゐる。元來この劇はマアテルリンクにしてはあまり人物事件が明瞭であり、派手であるので、之は俗受を主にした所謂當て氣味のものか、乃至は作者の夫人である女優ブランクに演らせて引き立つやうに、あんな物をわざと書いたのだといふ評もあるが、私は必ずしもさうばかりとは思はない。元來マアテルリンクには、英文學の感化が著るしいが、この一曲も、英國近代の大詩人ブラウニングが、同じ時代のフィレンツェ、ピサの話の材とした悲劇「Turin」を學ぶのだと云はれるほどで、マアテルリンクがこの一曲の狙ひどころは、全くルネッサンス時代の新精神、新氣運を暗示しやうとしたのだと思ふ。中世以來の因襲道徳の羈絆を脱して、更に新しい美しい生活に赴かう、自由な天地を創造しやうといふ當時の時代精神を、愛といふものによつて描かうとしたのが、この作の中心思想ではなからうか。最後の幕に、ヴァナが遂に夫ギドオを去つて敵將であつたプリンチヴァレの方へ赴かうとするところ、彼女の言葉に「之から美しい夢がはじまるでしやう」といふのは何を示すのであらう。美しい夢こそ、まさに之から始まらうとする近代生活、自由清新の境地を暗示する者ではなからうか。今までの暗い宗教や道徳を離れて了つて、

眞に解放された花やかな新人生がこゝから始まるといふ意味ではなからうか。私は近松座の觀劇によつて、よほど以前に讀むだ此名作の記憶が新にされたのを幸ひ、ルネッサンスの條に近代思想の黎明を説くに當つて、敢て此一節の無駄話を加へた。

2 近世史の波瀾

思想上の波瀾——二大思潮の混淆時代——
十七八世紀の思想界、(第一)宗教改革——(第二)主智的傾向——狂熱の反動——智識萬能主義——ヘイコン、アカルトの哲學——啓蒙運動——
——循俗主義——(第三)古典主義の文學——古典の研究とその崇拜——藝術上の法則——文字の彫琢——佛蘭西路易十四世王朝の文學——英國の古典派文學——形式模倣と似而非古典主義

カントの哲學——ルッソオの思想——浪漫主義——自然派時代——近世史上基督教思潮と異教思潮の混合と其消長——二十世紀現代の思潮——基督教思想の受けたる二つの打撃——(参考)二大勢力の衝突——懷疑思想對神秘思想

The Renaissance is, in part, a return towards the pagan spirit;... a return towards the life of the senses and the understanding. The Reformation, on the other hand, is the very opposite to this; in Luther there is nothing Greek or pagan; vehemently as he attacked the adoration of St. Francis, Luther had himself something of St. Francis in him; he was a thousand times more akin to St. Francis than to Theocritus or to Voltaire. The Reformation was a reaction of the moral and spiritual sense against the carnal and pagan sense.

—Matthew Arnold, *Essays in Criticism*, VI.

文藝復興は一部分は異教の精神に歸ること、また官能と智慧との生活に歸ることなり。然るに宗教改革は之と正反對にして、ルウテルには何等異教希臘の分子なし。かれは激烈に聖フランシス尊信を攻撃したれども、ルウテルかれ自ら聖フランシスの分子を有したりしたり。か

これはシオクリタスやヴォルテールに似たるよりも、遙によく聖フランシスに似たりき。宗教改革こそは、實に肉の異教思想に對する精神的靈的思想の反動なりき。(アアノルド「批評論集」のうち、異教及び中世の宗教心)

すべての生命の流れは波動であり、曲折である。一高一低、一張一弛、或は右し或は左して、その進轉の徑路にさまざまな波状をえがいて進むで行く。かの人文發達のあと、或は思潮變遷の歴史に、古きを繰返すと見ゆるは實は新しき創造であつて、波瀾曲折は即ちこの變化流轉に際して生ずる現象である。古代の花やかな希臘文明が羅馬に傳はつて、遂にその帝政の末年に頽れ、之に代つた基督教思想は、宗教信仰の偉大なる力によつて、約一千年間中世の暗黒時代を通じて、よく人心を統一し支

配し得た。その流れが遂にまた一大轉機に到達して、こゝに文藝復興となつた。さすがは近世史の出發點であるだけに、この大波のうねりは驚くべきものであつた。それは最早單なる古代思想の復活ではなくして、それよりも遙に複雑なる、混亂し紛糾した新現象を生ずるに至つた。

これまで私は希臘思想と基督教思想との争或は對立によつて、ともかく思潮の大勢だけは説く事を得たが、すでに文藝復興によつて近代思想の幕が開かれた今となつては、最早さう簡單な説明を許さない多くの事情が新しく生じた。即ち十七八世紀から十九世紀にかけては、これを希臘思想と希伯來思想との混淆時代と見、二潮交流の複雑時代と名づけるのが至當であらうと

思はれる。(そして十九世紀の末ごろから、二十世紀のはじめにかけての所謂「現代」と呼ばれる時代こそ、頓にまた希臘思潮が絶對優越の地位を占むるに至つた時期だと見るのが、私の論の歸結である)。ここには先づ十七八世紀を一緒にして、その思潮の大勢を假に三つに分けて説くとしやう。

第一は、Luther によつて起されたる宗教改革の思想史上の意義。

文藝復興によつて眞先に打撃をうけたものは、云ふまでもなく羅馬教會であつた。即ち一方に於て古典研究の結果は、今まで神聖であり絶對であると認められた羅馬教會の眞相を曝露し、他方に於ては、新しい人心の覺醒が生み出した自由主義個人主

義の思想が、教權に反抗して之を破壊しやうとした。かの聖書に次で基督教國の人々に廣く讀まれた十五世紀の Thomas a Kempis の名著「基督の模倣」『Imitatio Christi』の如きは、即ち最もよく當時新人の胸に兆してゐた宗教心を示したもので、教會僧侶の干渉を離れて直接に基督の教を仰ぎ、聖書の説くところによつて、眞に高く美しい信仰の彼岸に達しやうと云ふのがその中心思想であつた。この點に於ては、宗教改革は文藝復興の一面たる自由の精神、また教權破壊主義の當然の結果であつた。

しかしまた他の點から云ふと、宗教改革ハ文藝復興の風潮に對する反動の現象だとも見られる。即ち當時希臘思想復活の結果、あまりに本能的肉現世主義が盛になり、敗徳亂倫の風が

一世に瀰漫したのに對し、道心堅固な宗教信仰を以て之を抑制しようとしたのも、確かにまた宗教改革の一面に外ならなかつた。たとへばかの英國に於ける清教徒ピユリタンの運動の如きは、その最も著るしき一例であつた。文藝復興ルネッサンスの現世主義の餘波をうけて肉の歡樂に沈溺して、動もすれば驕慢放肆ならむとする一代の傾向に反抗し、殊に王侯の暴虐に向つて最も烈しい痛撃を加へたのが、即ち清教徒であつた。さきに沙翁等の處女王朝以來發達して來た英國の劇場は、遂にこれら教徒のために敗徳の源泉を以て目せられ、一時は全く閉鎖せられるの運命にすら立ち至つた。さきに一たび解放された肉の藝術的生活が、更にその反動として愆くまでも酷い壓迫をうけるに至つたことは、文藝史

上最も注目すべき現象であつた。

第二には、文藝復興期の新精神たる希臘思潮の顯著な一面であつた主智的傾向が、特にそのみ擴大されて、十七八世紀思想界の中心勢力となつた事である。

道學先生を尻目にかけて、正義人道のごときを云ふに足らずと喝破し去つて、ひたすら國家と君權の萬能を説き、權謀術數を教へた Machiavelli の『帝王論』英譯 "The Prince" 一五三二年)はたしかに一代の快著であつた。はるかに後に出たニイチエの絶叫と相呼應して、希臘思潮の一面たる現世主義の美的生活論を最も極端に最も痛快に叫むだもの、これがまたやがて文藝復興期の歐洲人心の傾向であつた。殘忍横暴を極めて、貧婪飽くを知らな

つた者は獨り王侯のみではない、肉慾に耽溺して一切を忘れ、あらゆる惡徳を犯しても自我の満足を得やうとする風潮は一世を蔽ふた。そして恚ういふ現世主義に反抗して、そこに別に敬虔な崇高な宗教信念を鼓吹しようとしたのが、即ち宗教改革の一面であつたことは、既に上に述べた。しかし人心動搖の時代の常として、ものは忽ち極端から極端へと走つて行く。即ちこの宗教改革は、また一種の狂熱フアンチイゼムの傾向を生み出して、遂には中世の禁慾主義を、またも一度繰り返すことかと怪まれるに至つた。かの十七世紀前半の歐洲を、全く戰塵の巷に化した一種の宗教戦争たる三十年戦争のごとき、要するにこの狂熱的傾向が生み出したる慘劇に他ならなかつた。靈を忘れて肉に行かうと

する者と、肉を忘れて靈に行かうとする者と、ひとしく共に聰明なる理智レイゾの支配を失つて、極端は極端と相戦つたのである。猛烈なる自我主義者と、極度の宗教道徳論者と、兩方ともに久しからずして其熱は冷めた。熱が冷めたとき、靜かに自己を振り返つて見て、そこで氣付くのは、冷靜にして聰明なる理性と智力の難有味ありがたみである。十七八世紀思想界の主智インテリゲンチヤリズム的ラショナルイズム唯理的の傾向は、即ち恚くイライラの如き人心の要求あつたればこそ生れたのである。

この傾向は一轉して直ちに、さきの文藝復興期の客觀的、自然科學的、實驗的精神と相結び、またかの一切の權威を排せむとする智識萬能主義サイエンス (Bacon) の所謂「智識は力なり」*Ipsa scientia potes-*

tas est. Bacon, *Meditationes Sacrae*)と相合した。かの近世哲學の二大源流とも云ふべきもの、一は英吉利のベイコンに發したる經驗論で、之は一切の偶像 *Idola* を破壊して、飽くまでも事實に徴し、實驗に徴して進まうといふ歸納的研究の態度、他の一つは佛蘭西の *Descartes* に發したる唯理哲學で、之はかの名高い「我は考ふ、故に我は存す」*Cogito ergo sum* といふ言葉にある通り、先づ一切を疑ふといふ懷疑的態度を以て、すべての正確なる智識の基なりとした説である。近代の自然科学の精神は、全くこの英佛の組織的哲學を源として發してゐる。更にまた之を推し進めて考へると、十八世紀英佛獨の思想界を代表する所謂啓蒙思潮といふものも、全くこの主智的傾向から生れたことは、理の極めて暗

易きところであらう。

啓蒙運動即ち *Enlightenment* は、一にまた智力の解放 *emancipation intellectuelle* を以て呼ばれる。傳來の偏見迷妄を打破して、人智を啓發しやうといふのが本來の主旨であつた。文藝復興よりこのかた發達して來た自然科学と、又それに關聯して起つた哲學宗教道德に關する研究、殊にベイコンの經驗論などを平易通俗に説いて、之によつて一般文化の進歩に貢献しようといふことだ。其特色が唯理的であり、また理智萬能であつたことは今更いふまでもない。

さて恁ういふ唯理的主智的傾向は、一般の思想上に於て狂熱を忌み、感情の奔放を避けやうとする結果、何事にも道理が命

する中庸の道を行かうとする。従つてまた如何なる場合に於ても、冷靜な常識や分別を離れまいとするコンセンソナリズム 循俗主義を生ずるに至つた。熱烈とか矯激とかいふ言葉で形容されるやうな一切の思想行爲を非認して、ひたすら法則を遵奉し、慣習と先例に違はざらむとする傾向を生じた。これは人々の意志や感情を尊重する個人主義の思想と、全く正反對の行き方であることを注意せねばならぬ。

第三の問題は、上來述べたやうな思想界の主智的傾向が、十七八世紀の文藝上に、果して如何なる傾向を生じたかである。この問ひに對しては、極めて概括的ではあるが、先づ古典主義の文藝だと答へて不都合はない。

古典主義の文學は、平たく云へば理に落ちた文學である。感情の熱烈もなければ、想像の奔放をも許さない冷かな理智の文學である。徒らに機智キツトの鋭きを誇つて文字の彫琢に耽り、單に美辭麗句を聯ぬるのほか餘念なきものである。或る者は詩の形を借りて、實は枯淡の理を談じ、或者はまた之を以て諷刺嘲諷の利器となすに過ぎない。一言にして云へば、眞の詩情に乏しい理屈プロゼイックつばい散文的な文學を謂ふのである。

さきの文藝復興期の古典學者は、心血を瀉いで希臘羅馬の詩文を研究した。そして其結果は古文學を尊崇敬慕するの餘り、その典型に據つたものでなければ、眞の文學ではないと考へるに至つた。内容と形式の調和、その統一、完美、莊嚴、均齊は、

すべての藝術が模範として仰ぐべき唯一最上のもので、そこには藝術上の法則 artistic canons も見出されるれば、また絶対美 *beauté absolue* の標準もある。この法則、この標準を守つて、毫も亂る事なきものこそ、眞に優秀なる藝術品であると彼等は考へた。この點に於て古典主義は藝術上にあらはれたる教權主義であり、また循俗主義である。一步を轉すれば、毫も潑刺たる生氣を有せざる月並の文學に墮するほか無きものである。

古典主義が奉ずる藝術上の法則の一例を云へば、劇に於ける三一致 *Three Unities* の説の如き、その最も著るしきものである。即ち昔のアリストオテレスの説いた所では、一篇の悲劇は必ず同一の事件と、場所と、時日とで成立たねばならぬ。即ち希臘

の古劇では、その舞臺となる場所は終始皆同じ處であり、劇中のすべての事件は同一日間の出來事であり、またその劇中の色々な事件も、重な一つの筋に關係の無いものを入れてはならぬと云ふことになつてゐる。恚ういふ八釜しい規則を守つたことが、即ち古典劇の特色である。かの浪漫的な沙翁劇などは全然この三つの一致を無視したもので『あらし』*“The Tempest”* のやうな除外例はあるが、従つて十七八世紀の古典派からは、粗莽破格の戯曲として、三文の價値もないやうに云はれたのである。(序にいふが、近代のイブセン劇でこの三一致を嚴守した例があるが、それは勿論法則遵奉の精神から來たのではないので、あれは全くイブセンが作劇上の眞の實際的必要が然らしめたのである)。

また當時の古典派文學が、如何に文字の末に腐心したかの一例としては、十八世紀文學の一特色である婉曲語法 Periphrasis のことを挙げやう。即ち當時の文人は貴族的であり技巧的であつて、何でも自然の情を露骨に有の儘に言ひ顯はすことを下品だと思つた。直截に云ふことを避けて、わざ／＼古代の文學を模倣した廻りくどい修飾語法を用ひやうとした。夕日と云へば濟むのを reddening Phoebus と云つて見たり、魚を scaly fihe だの、鳥を plummy form だのと云つたのは、ちやうど以前の日本の和歌や漢詩などにあつた月並な言ひ廻はしと、全く同じやりかたであつた。

さて恁ういふ傾向の文學は、當時歐洲文學の中心勢力であつ

た佛蘭西によつて代表せられる。かの光芒燦爛たる路易十四世王朝の佛蘭西文學に、評壇の權威として仰がれ、殆むど藝術の法則を示す立法者のやうに貴ばれた Boileau こそ、實に古典主義の文學の指導者であつた。殊にかれが羅馬の古詩人 Horatius を模倣して作つた『詩論』(L'Art Poétique) (一六七四年)は、詩の技巧と形式とを説いたる一代の名著で、整齊の美と明晰の美の重むべきを教へたその詩説は、實に當代の騷人をして向ふところを知らしめたものである。なほこの路易王朝盛期の劇詩人として、Racine, Corneille, Molière 等の大名は、今さら私がここに挙げるまでも無からう。

また之を英吉利で見ると、古典派の詩歌を代表するものは、

十七世紀に於て Dryden^{ドライデン} であり、十八世紀に於て Pope^{ポップ} である。二者ともにその詩料とするところは、當代事實の諷刺か、或は教訓か、然らざれば律語を用ひる談理の類であつて、毫も感情と想像の分子を交へざる乾燥無味のものであつた。唯だ詩の形式美、文字の彫琢といふ點に於ては、殆むど英吉利文學の古今を通じて、この時代の詩歌に優るものなしと云つて差支ない。殊に英吉利の古典派詩人が専ら用ひた五脚對聯の英雄體 Heroic couplet^{ヘロイック・カップレット}といふ詩律は、このドライデンとポップとの作によつて、眞に美の極致を盡くしたのである。

ここに一つ注意すべき點は、この十七八世紀に於ける尙古の風潮は、眞に希臘古典の精神を傳へたものでは無くして、寧ろ

それから流れ出たる羅馬文學即ち拉甸の詩文を、それも眞に學むたのではなくて、單に形骸を模倣したのである。だから此風潮を眞の古典主義とは云はずして、却つて似而非古典主義 Pseudo-Classicism^{ピュド・クラシシズム} の名を以て呼ぶのである。元來希臘思潮の著るしき特色は、物質と精神と、肉と靈と、或はまた理性と感情と、外形と内容と、これ等のものの中に毫も不調和を見ることなく、總てが渾然たる一致をなしてゐるといふ點にある。それが羅馬の文學となると、既に希臘を學むでから出來た者だけに、そこにもういくらかの不調和が現れてゐる。それをまた後の古典派は直接に希臘へ行かず、主として羅馬を模倣したのであるから、遂に古典の眞精神を没却するやうな事になつたのである。お

もふに希臘、殊に雅典^{アゼニス}盛期の藝術の貴ぶべきは、うちに燃ゆるやうな情熱を包むで、而かも亂れず騒がざる莊重沈靜の美にあつた。理想にあこがれ、感情に酔ふて、なほ之を抑ゆる冷かな理智の力を失はず、従つて内容と外形の美とが完全な一致を得てゐた點にある。そしてこの一致調和がまた極めて自然に無意識に、少しも斧鑿の痕をとどめずして成し遂げられた點に特色がある。十七八世紀の文藝は、畢竟その半面を學んで未だ到らざるものに過ぎなかつた。徒らに形式を學んで眞意を逸し、その結果は熱もなく情もない理に落ちた詩文を生じたのである。以上の大勢に反抗して起つたものが、浪漫主義^{ロマンティスム}である。

*

十八世紀末から十九世紀の初にかけて、古典主義が浪漫主義となり、それが更に自然主義となつて、千八百七十年前後の科學萬能の時期を劃し、次で前世紀末からは、更に反自然主義の風潮が之に代つたのである。この最近百餘年間に於ける文藝思潮の變遷に就ては、さきに私が『近代文學十講』の方で稍々詳しく論じた事であるから、ここでは一切の説明を省略して、單に綱目と要點だけを擧げることにした。

さてかの啓蒙運動も漸くその本來の面目を失つて、遂には一種の權威^{オピニオン}を以て社會に臨むが如き傾向を生ずるに至つたので、この方面に於てそれに反抗して起つたのが、即ち批評的精神を以て根底とした Kant^{カント}の哲學であつた。しかし之に次で、文藝の

方から見て最も大切であつたのは、啓蒙運動の主智的人巧的傾向に反對して、自然の儘なる感情生活を重しとした Rousseau の説であつた。かれが十七八世紀の冷索なる循俗主義、形式主義に對し、おもひ切つて、「自然に歸れ」と叫むだ聲こそ、實に近代浪漫主義の曉鐘であつたのだ。過去幾千年の間人類が辿つて來た文化發達の徑路を振り返つて見るとき、人は果して今まで眞に蹈むべき道を蹈むで來たのであらうか。在來の因襲や法則を打ち破り、も一度最初から新しく出直はして、本當の *folk* な人生を生きるべきではなからうか、と恚う思ひかへしたとき、そこに近代思想の顯著な一方面ともいふべき原始生活追慕のころが、先づ *Russos* に起つたのである。これは獨り浪漫派ばかりでなく、後の自然派に至つて更に一段の力を加へ、今に及ぶでなほ藝術思潮の根本をなしてゐる所の自由主義、偶像破壊、民主的精神、自我解放思想の源である。

浪漫派の文藝は、極端なる主觀的性質のものであつた。冷かな理智や形式を排して、熱烈の感情と、奔放の空想を貴むだ抒情主義の文藝である。従つて在來ありふれた題目を避け、珍奇怪異な變りものを材料とし、烈しい悲哀、不可思議、恐怖、戦慄、憧憬、すべてさう云ふものにはかり目を付けたのが、此派の特色である。その結果地上現在の生活に極めて疎い非現實的な超自然の藝術となつて了つたのは當然の勢である。〔近代文學十講第五講第一節二一四頁—二二四頁參照〕

さてこの浪漫派がその極盛期を過ぎて、稍々老^ワむとする前世紀の中ごろ、之に代つて猛然として現はれたる科學萬能の思想は、忽ち全歐を風靡して、ここに自然派の全盛時代を劃した。現實主義、實驗主義、客觀主義、懷疑主義、物質主義、すべて之等の言葉が當時に於ける藝術思潮の種々な方面を代表するものであつた事は、既に讀者の熟知せらるる所である。『近代文學十講』第三講第四節、第五講第二節以下、第六講、第七講、參照。ここまで論じて來て、さて私は本論の最初からの立場である基督教思潮と異教思潮との對立といふ點に立歸つて、一應考へなほして見たい。即ちさきにも一度述べたやうに、文藝復興以後すべての近世思潮は、全く古代の異教思想と中世の基督思想

との會流交錯に他ならないが、かの古典主義以後自然主義に至るまでの約二世紀間の藝術も、無論この二大思潮の混淆から生れたのであることを、特に強めてここに繰返しておく必要がある。

十六世紀の文藝復興期は、いままで中世の基督教に抑壓されてゐた異教思潮の復活であつて、それ以後の所謂廣い意味の近代思想は、要するに皆文藝復興期の精神の繼續であると見るのが普通の説だ。しかしまた仔細に考案して見ると、その間には非常に複雑な混淆もあれば、また起伏消長の歴史も繰返されてゐる。先づかの宗教改革は、自由革新の運動であつた點に於ては異教的であるが、他の一面から見れば、文藝復興期の異教思

想があまりに肉的本能的なるに對して、靈的基督教生活を鼓吹するものであつた。それからあの頃新らしく英吉利や佛蘭西に出た哲學は、その實驗科學的なる點に於て異教的であつたが、それも後に至つて漸く權威を以て社會に臨むに至つては、また著るしく中世教の臭味を帯びたのである。だからそれに次で出た啓蒙運動は、信仰や權威を排して、希臘思想の智識本位の自由精神を鼓吹したのである。またかの十八世紀の古典主義は、その名の示すごとく、専ら希臘羅馬の文藝を模倣するものであつたが、それと同時に徒に模倣を事として因襲を貴び、權威に盲從するの點から云へば、その半面は明かに中世思想の分子を代表してゐる。さて恁ういふ風潮に反抗して起つたカントの哲

學は、その批評的自由の精神に於て、無論異教思潮の分子を有つてゐた。ところが、それに次いで出たものが、即ち十九世紀劈頭の浪漫主義であるから、これはもつと烈しい自由思想個人主義を鼓吹した點に於て、云ふまでもなく異教的である。しかしここに注意すべきことは、classic といふ言葉が古代異教の文化を意味する如くに、romantic といふ言葉は、其語源から見て、中世の基督教時代を意味するものである。即ち浪漫主義の一面には熱烈なる中世思慕の精神、即ち Mediaevalism といふものがあつて、その根底をなしてゐたのである。浪漫主義のうちには、だから異教分子と共に、この中世の基督教分子が相混合してゐる状態であつた。

次で出た自然主義は固よりこの浪漫主義の繼續であつたが、その特色は、極端なる唯物的機械的的人生觀にあつた。だからその實驗科學萬能主義の當然の歸結として、先づ神といふ。超自然的な空疎な觀念を叩き壊してしまつた。さきの浪漫派では、その開祖のルッソオのやうな猛烈な論客でさへ、まだ神といふ思想だけは棄てずに、その著書の隨處に信仰のことは説かれてゐた。さういふものを全然破壊し去つて、地上眼前の現實生活のみを重しとし、ひたすらそれのみ執着しやうとする傾向、即ち希臘思想の最も顯著な一面をあらはしたのが、自然主義であつたのだ。即ちこの天國を否定し神を破壊する思想こそ、實に近代史の上に於て、基督教思潮が受けたる最大打撃であつた。

さうだ、いかにも今にして憶へば、自然主義の功過は全くその破壊的方面にあつたのだ。浪漫派時代の空漠たる、夢のやうな理想を排し、徒らに天國にあこがれたる者をめざまして、最近の肉的異教的現世主義のために道を開いただけが自然主義の手柄で、その根底たる唯物觀に至つては、到底行き詰つた悲哀の色を帯びたる消極的のものに過ぎなかつた。その唯物觀がやがて廢れて、最近に於ける樂天的新理想主義となつたので、ここに眞の積極的建設的努力時代があらはれた。靈肉合一の異教思潮が全勝を得たのが、即ち最近の傾向であると私は信じてゐる。

回顧すればかの十七八世紀の啓蒙運動や古典主義より、權威

服従因襲模倣の傾向を除き去つて、其智識理性本位の傾向を探り、浪漫主義よりは、その空想的方面、特に中世思慕の態度を削り去つて、自由なる個人主義の思想をのみ傳へ、次で起つた自然主義からは、其現實主義のみを採つて決定的唯物觀を棄て、愆く、の如くにして出來たものが即ち二十世紀現代の異教思想であると思ふ。古典主義、浪漫主義、自然主義、すべてさう云ふものの有してゐた長所とも云ふべき希臘思想の分子だけを傳へて、文藝復興期以後ここにはじめて二十世紀の劈頭に、めざましき異教思潮勝利の時代が出現したのであると私はおもふ。

○ 歐洲古來の基督教思想の勢力をして、近世に至つて著るしく弱からしめたものが二つある。一は獨逸の大思想家大詩人ゲー

テによつてひろめられた異教主義、他は十九世紀の中頃、科學が全盛を極めたころの自然主義であつた。前者によつて美と藝術とが人生の福音として説かれ、後者によつて、物質的機械的的人生觀が唯一の眞理として説かれたことは、たしかに基督教に取つては大打撃であつた。たとへばかのニイチエの反基督説のごときも、見かたによつては、全くこの異教主義と自然主義との二つの流れから出たものだとも考へられる。愆うして基督教が近代に至つて漸く衰勢を示し、本來の面目を失ふに至つたといふ現象は、西洋基督教國の學者によりは、却つて吾々異邦人にしてかなたの思想や文藝を研究する者の目に、それが一層際立つて見えるのである。私は必ずしも現代の基督教が、中世修

道院のそれや、或は清教徒の信仰のやうでない事をのみいふのではない。またそれが澎湃たる異教思潮の勢力の前に屈服して、色々の名の下に、著るしく異教化せむとしつつある現象を指すのでもない。今日眞に文藝思潮の根本を動かしてゐる活きたる力として、基督教の信仰——特にその靈的權威が驚くべく微弱であることを、私は誰が何と強辯しても、否定すべからざる事實だと信するのである。かの Maeterlinck の神祕思想の如きが、殆むど基督教的色彩を帯びず、所謂「無神の宿命論」 in fatalisme sans Dieu だと呼ばれたといふやうな事實は、單にこの趨勢の一端を語るものに過ぎない。殊に最近一部の文藝に現はれてゐるカトリックリヴァイブ舊教復活の現象のごとき、歐洲の批評家にして尙ほ且つ之を目

して、異教化されたる基督教であると喝破してゐるではないか。
 (参考)

おもふに二つの勢力が衝突し争闘するところに、人生の悲劇は生ずるので、この悲劇があればこそ、思想界には進歩もあり展開もあるのである。若し常に一つの力のみが優越の地位に在つて動かなければ、人間の歴史はまことに太平無事ではあるが、驚くべく單調な、固定沈滞の喜劇に終つて了ふのであらう。そこで個人の生活の上に肉と靈と、理想と現實と、感情と理性との分裂があり、衝突があるやうに、歐羅巴の思想史には、常に唯心論と唯物論と、拉甸民族の傾向と獨逸民族の傾向と、古典主義と浪漫主義と、是等二つのものの對立

が、人文進化の歴史をつくつて來たのである(本書一〇頁参照)。ところが私は最初この論文の出發點を、異教思潮對基督教思潮の抗爭に置いて、現代を以て異教思潮勝利の時代、新異教主義 Neo-paganism の世界だとする結論に到達しやうといふのである。がまた更に之を別な方面から論ずると、歐洲三千年の思潮史は、懷疑主義對神祕主義イスタシズムの消長史だとも云はれるのである。先づ第一に希臘羅馬の古代を懷疑思想の時代とし、次で中世を神祕信仰の時代だとする。それが文藝復興期ルネッサンスに入つて、自然科学の勃興、人心の覺醒と共に、再び懷疑の風潮を生じて、それが十八世紀末に及むだ。十九世紀劈頭の浪漫主義は、また情緒主觀を中心とした神祕思想時代、次で起つた

科學萬能の自然主義時代は、いふまでもなく無理想無解決を叫ぶ極端な破壞的懷疑時代であつた。ところが十九世紀の末年から今世紀に及むでは實驗と共に直感インシュイションを、理智と共に情緒を重むするまた全く新しい意味の神祕思想の時代が出來た、と恚ういふ風に見るのである。この最近の變遷の年代に就ては、米國——實は瑞典の批評家 Björkman ヘンリク といふ人が、その著『明日の聲』“Voices of Tomorrow”のうちに、下のやうな見解を述べてゐる。即ち千八百八十六年イブセンが “Rosmersholm” を出した年に、文藝上の自然主義、哲學上の唯物論の最後は既に目前に迫つてゐた。それから後三年、即ち千八百八十九年に、三つの書物——それは當時あまり世の注意を惹かなかつたが、

今日から云へば實に新思想の曉鐘とも云はれるべき三つの書物が、この新時代を代表すべき三人の天才によつて書かれた。それは

第一、新神祕思想の詩人マアテルリンクの最初の劇『マレイヌ姫』(Princess Malaine) (これによつて彼は「白耳義の沙翁」の名を得た)。

第二、新神祕思想の哲學者 Bergson の最初の名著『時間と自由意志』(Time and Free Will)。

第三、新神祕思想の豫言者 Grierson が、英人でありながら巴里で佛語を用ひて書いた一小冊子『理想主義の反抗』(La Révolte Idéaliste)。

それより以後に發達した現代新思潮の萌芽は、多くこれらの三大著のうちに現はれてゐるのを見れば、この千八百八十九年を以て先づ最近思潮の廻轉期だと見、現代思潮の特色を以てこの新神祕思想の勝利であると見做すのである。これも一種の見かたとして、とにかく参考までに擧げておく。

第五 希臘思潮の勝利

1 靈肉合一觀

ロバトスンの希臘思想論——靈肉合一觀——
歐洲最近の反物質主義——象徴主義——肉の
讚美者ホキントマン——肉の要求と靈の要求
——千八百八十九年

Let us not always say

“Spite of this flesh to-day

I strove, made head, gained ground upon the whole!”

As the bird wings and sings,

Let us cry “All good things

Are ours, nor soul helps flesh more, now, than flesh helps soul!”

—Browning, *Rabbi Ben Ezra*, xii.

「今やわれ等はこの肉を顧みずして努力し、概していへば向上し

進歩したるなり」とは常に云ふ勿れ。鳥が飛び歌ふ如くに、先づ斯く云はしめよ。「すべての好きものは吾等のものなり、肉が靈を助くるより以上に、靈は肉を助くるにはあらず」と。

英國の名高い説教家

Frederick Robertson

は希臘思想の特徴を數

へて、第一には少時も休みなき努力、第二にはその現世的なること、第三には美の崇拜、第四には、神でない人間的なものを崇拜すること、この四つを數へた。之等は誰が考へても異議のない點ではあるが、私はこゝで希臘思想そのものに就て論ずるよりは、寧ろそれが如何なる點に於て現代思潮の根底をなしてゐるかを示したのであるから、必ずしも此ロバトスンの説には従はないで、別に異つた四つの方面から説く事にした。

第一には希臘人の抱いてゐた物質論の思想は、決してかの自

然主義的唯物觀の類ではなくて、寧ろ最近思潮の一面である物質即精神の思想、換言すれば靈肉合一觀であつた。

古代希臘の哲人はプラトオンにせよアリストオテレスにせよ、みな物質の實在を認め、かれ等はすべての物質を、單に精神の顯現に過ぎないと見るやうな唯心論的思想は抱かなかつた。が、またそれと同時に一方には、自然主義論者や或は科學萬能論の信者が云つたやうな、純粹の唯物論をも説かなかつたのである。希臘思想の特色は、飽くまで現在の肉の物質生活に執着しながら、同時にまた、その基礎の上に建てられた靈的精神生活を否定しなかつた點にある。そして之がまた歐洲現代の思潮と、殆むど方向を同じうしてゐると見られる所以である。かの

「詩歌的數學」の創始者なりと云はれた故 Poincaré の所説、また物理學者の立場に在つて今しきりに神祕信仰を説く Oliver Lodge の宗教論、實驗と共に直覺を重しとする Bergson の哲學、そのほか故 James の實用主義より最近英米の新實在論は云ふまでもなく、Encken が精神生活の論に至るまでも、その間に程度と色調との相異こそあれ、みな悉く希臘思想の根底たる靈肉一致觀と行きかたを同じうした者ではなからうか。少くとも、其間に一脈の相通する所なしとは云はれないであらう。

最近の反自然主義、非物質主義の傾向は、要するに肉に對する靈の覺醒 réveil de l'âme であつた。文藝の上では最も廣い意味で云つた新浪漫主義の思想、また其主要な傾向を言ひあらはし

た所謂象徴主義シンボルイズムそのものも、畢竟するにこの靈肉一致の世界観が生み出した文學に外ならないのである。客觀界と主觀界と、目に見える世界と目に見えざる世界と、物質界と靈界と、また有限の世界と無限の世界との間には、そこに互に相應じ相通ずるところの一致照應コレスポンデンスがあるのだと云つた佛蘭西象徴派の詩人の如き、今にしておもへば、即ちまた此最近思潮の曉鐘であつたと見られるであらう。

自然と人道と民主デモクラシー々義との詩人であつた米國の Whitmanウィットマンが、その死後、ことに最近數年、益々甚しく西歐の文壇に持囃されるに至つたのは、彼の思想が靈肉の調和を根本として、極めて大膽に肉の美を讚嘆したからである。「肉若し靈にあらずむば何

をか靈といふ」と彼は云つたが、この態度こそ、即ち毫も靈肉の不調和を感じなかつた希臘思想の特徴ではないか。その作『自己の歌』*Song of Myself* は、此詩人の人生觀の最も完全なる告白であるが、そのなかに(第四十八節)。

I have said that the soul is not more than the body,

And I have said that the body is not more than the soul,

And nothing, not God, is greater to one than one's self is.

靈は肉に過ぎず、肉は靈に過ぎずと我云へり。また何者も、たとひ神といへども、人にとつて自己より大なる者なし。

また『われはエレキの肉體を歌ふ』*I Sing of the Body Electric* と題した詩の第九節には、殆むど三四十行にわたつて人體の各部を仔細に列擧し、さて最後に憊う云つた。

O I say these are not the parts and poems of the body only, but of the soul,

O I say now these are the soul!

これ等はただに肉體の各部と詩には非ずして、靈のそれなりと、われは言ふ。あゝ我は云ふ、之等は靈なりと。

肉體を歌ふに當つてホキットマンの飾りなき大膽なる詩句は、卑の譏なしに之を日本語に移すことの到底不可能なものが尠くない位である。

人が肉の要求を感ずること現代の如く痛切にまた激烈な時代は、未だ嘗てなかつた。もとより今人の肉の要求は、それが強烈なだけそれだけ、また靈に對する強い要求をもその中に包含してゐるので、ちやうど古代の原始的な希臘人がしたやうに、靈と肉との渾然たる一致合體の境地に、眞の生の充實を見出ださうとしてゐるのが、現代の特徴である。

さきの自然派時代の肉的な唯物主義が、前世紀末から起つた「靈の覺醒」に促がされて、最近のこの靈肉一致觀に入つた事を、少しく精密な年代に就いて云はうとすれば、先づ千八百八十九年といふところを、この廻轉期と見做してよからう。既に前章の終りにビョルクマンの説を紹介して云つた通り、この年にマアテルリンク、ベルグソン等の名著が、はじめて世の視聽を聳てたといふ著るしい事實のほか、小説の方でも、佛蘭西の *Boite* が精緻な心理描寫の筆を揮つて、佛蘭西青年の懷疑的傾向を戒めた名作『弟子』『The Disciple』がこの年に出て、在來の唯物思想に代ゆるに最近の新思想を以てしたことを、先づ注意せねばならぬ。なほまたこれとは稍々時を隔てて、今ではもう故人になつた

Rod が『生命感』『Le Sens de la Vie』を書き、また故 Melchior de Vogüé が『露西亞小説』『Roman russe』を出したのも、今日からおもへば皆、現代の新傾向に移らうとする世紀末の轉期を豫示したものに他ならなかつた。

2

聰明の智力

明敏なる理智——マシウアーノルドの所説——シヨウ、アナトオル・フランヌ——嚴正と明晰——希臘藝術の特色——クラシシズム——ニイチエの『悲劇發生論』——希臘人の運命觀——諦めと努力——人生全面の觀察

Who saw life steadily and saw it whole.

—M. Arnold, To a Friend.

しかと人生を見、その全部を見たる人、ソフォクリズ。(マシウ)

アッノルド「友に寄す」

Griechheit, was war sie ? Verstand und Mass und Klarheit.

—Schiller, Griechheit.

希臘風とは何ぞや、明察と節度と明晰と是れなり。(シッレル「希臘風」)

次に最近の傾向はたとひ神祕を説き天地の一大靈氣を信じ、また不可知の世界に思を寄せてゐても、それはかの無智な中世の人や或は昔の浪漫派の詩人がしたのとは違つて、其根底には極めて聰明にして慧敏なる理智の力を失つてゐないといふ點に特色がある。現代の人は最早さきの自然主義時代のやうに直接經驗の萬能を信じ、自然科学が示し得るところを以て唯一最上のものだと信じてゐないが、それと共にまた科學的研究、批

評的精神の重むすべきを忘れず、道理と智識とに對しては、極めて冷靜に、謙讓な眞摯の態度を持してゐるのである。何事に限らず自分の智力が認めて然りとなす所でなくては承知しない。これがやがて異教思想の特色であり、また文藝復興期の眞精神でもあつた。(ここに理智といふのは、最も廣い意味に於てである。それはもはや以前の自然派時代のやうに、直接經驗と客觀の世界に閉ぢ籠められた窮屈な智力をいふのではない。時には想像の羽翼に駕し、直感の力をも藉つて、人生の全域を透察し、その眞を掴まうとする明敏なる心の作用を意味するので、たとへばマアテルリンクの言つた clairvoyante な智の如きをも含めて云ふのである)。

『智は眞を語るに在り、また意識して自然に應じて行動するに在り』。Wisdom is to speak truth and consciously to act according to nature」と言つたのは、Ephesusの哲人 Heraclitusであつた。今日では眞の希臘思想の源流は、ソクラテスなどよりも、却つて此ヘラクライトスに在りと見られてゐる位で、この言葉の如きは眞に希臘古代の人の中心思想を云ひあらはしたもので、それがまたやがて現代の精神に他ならない。かのプラトオンが、純なる智識を愛する者、事物を有の儘に觀察するもの—即ち *philosophy* にして、はじめて神聖の生活に達し得べしと云つたのも、また同じ意味ではなからふか。古代の希臘人が如何に鋭く事物を觀察し、明晰なる想像力を有し、またそれを直截に云ひ現はすことを知つて

わたかば、今日希臘語——特にアライカの語を研究する者の容易く首肯し得るところである。

英國近世の大批評家マシウ・アノルドは、其名高い論文の一つに於て、希臘思想を希伯來思想と比較し、前者は後者の如く單に神の教を信じて教權に服従する者ではない。自ら正しく又明かに事物の真相を見、自己によつて理をさぐり、眞を求めやうとする者であると論じて、さて下のやうに言つた。(原文省略)

無智を脱すること、事物を有の儘に見ること、有の儘を見て其美を見ること、これ即ち希臘思想が有したる單純にして興味ある理想である。この理想の單純と妙味とあるが爲めに、希臘思想と、其思想に養はれた人の生活とが、空靈の安靜を

得 明晰と光彩とを得るのである。吾人が呼ぶで sweetness と light と呼ぶものに満つるのである。

—Culture and Anarchy, Chap. IV.

現代に於て英國の Bernard Shaw の皮肉な嘲笑的態度の如き、畢竟非常に聰明なる理智を以て、凡ての社會現象の奥の奥まで、裏の裏までを透察したる結果が、遂にあれほどまで冷かな觀察者となり、皮肉屋となり得たのである。彼の作物の如きは、最も嚴密なる意味で云つた智の文學である。また之とは全く趣を異にしては居るが、佛蘭西の Anatole France などが書く物も、全く沈靜な智力の所産である。現にかれの近業『神は渴す』Les Dieux ont Soif (近頃英譯が出來た)の如き、白刃の鋭さを以て、古今に

りなき人情の機微を穿ちたる好適例である。

希臘人は如何に熱したる感情の高潮に達した場合でも、冷かな理智の力を失はなかつた。情熱の奔放を、智の冷靜によつて抑へることを忘れない民であつた。Paterが Winckelmann を論じた文中の語を借りて云へば、かれ等の特性は「熱情ある冷靜」 *passionate coldness* であつた。そして此傾向が著るしく藝術の上に現はれて、整齊典雅の美となり、所謂古典の嚴正 *severity* と明晰 *clearness* とをなしたのである。Lessing が『ラオコオン』Lacoon の冒頭に引用したキンケルマンの言葉に、希臘藝術の特色は「けだかき單純と靜かなる偉大」 *edle Einheit und stille Grösse* なりといひ、大なる海が、たとひ其面に波たち騒ぐとも、深き底は靜かであ

るのに似てゐると評した意味も、全くここに在る。

古典藝術の美として何よりも貴ばれる釣合即ち *proportion* なども、よく考へて見ると決して單なる法則や規範ではなくて、つまり事物を有の儘に見て、その *truth* と *reality* を掴まうとする智力の顯現に外ならない。或る事件にせよ或る人物にせよ、それを描いてちやんと釣り合が取れてゐないといふ事は、つまり自然その者の眞を逸してゐるからだと思ふ。かのアリストオテレスの哲學の基礎である「中庸」*mean* の説の如き、眞に希臘藝術の根本精神であるが、あれは單に兩極の中間といふだけの意味ではなくて、つまり究極の眞と實とを、聰明伶俐な理智の力によつて捉へるの謂であらう。後の十七八世紀の古典主義の文

藝の如きは全く此眞精神を逸して、單に古典の外形を學び、こゝと、さらにそれを規矩準繩として、模倣しやうとした結果、かの生氣なき月並の藝術に墮したのである(本書自一一〇頁參照)。内容と外形と、理智と情熱と、すべての間に不調和の缺點を有たなかつた古代希臘の天才は、其自然の儘な天賦の能力によつて、故意にはなく、全く自發的に、冷かな整つた、そして明晰な藝術品を作り得たのである。従つてその冷かな所に情熱もあれば、整つたうちにも生氣の躍動が見られたのであつた。熱烈の眞情を端正の外形に包むたる古代藝術の神品は、慙くの如くにして生れたのである。近頃になつて歐洲文壇の一角に新しく新古典主義レシズムの聲を聞くに至つたのも、畢竟私がここに言ふ所の異教思

潮の一面を復活させるものでは無からうか。自然に親しむ原始的な氣分を失はず、表面は冷靜素朴にして、うちに複雑多趣の熱意を籠め、よく節制と統一とを全ましたる現代藝術の傾向を以て、私はたしかに希臘藝術の精神の復活だと見てゐるのだ。

ニイチチは其『悲劇發生論』Die Geburt der Tragödie のうちに、希臘思潮の本質を二つに分けて、アポロ型 *apollinische* とディオニソス型 *dionysische* とした。前者は希臘の美の神太陽の神、また赫耀たる光明の神になぞらへただけに、冷かなる眞と美とを貴び、明晰なる智の傾向を代表する。後者は酒と歡樂の神ディオニソスを思はせるやうな、洵醉と熱情と空想と夢幻とを代表する。従つて廣く之を人間生活の上から云へば、アポロ型の傾向は智識

義務、慣習、形式などの靜的方向に、ディオニソス型は自由、興奮、直覺、戀愛などの動的方面に現はれるのである。そして此二つの者がよく悲劇的調和を得てゐる事が、即ち希臘の思想と藝術が千古に卓拔せる所以に外ならない。換言すれば、ディオニソス型の自由奔放な情熱と空想とを抑制し、限定し、形成する所のアポロ型の精神、即ち智力の聰明を失はない處に、希臘思潮の眞面目が見られる。

さてこの冷靜な智力は、希臘人の人生觀をして希伯來人のそれとは全く異つた特色を帯びしめたと共に、そこにまた一種の運命觀を生ずるに至つた。此點に於ても私は現代文學の思潮との間に再び明白な類似を見出すのである。

上にも述べた如く、希臘人はすべて有の儘の事實を極めて聰明な頭で考察した。經濟上また科學上の現象を自然の儘に如實に見てゐた。だから希伯來人のやうに矢鱈に大きい馬鹿々々しい希望を抱いて、それが到底實現されないからと云つて、天國といふ一つの理想境を別につくつたり、現世を苦患の世界と見て了ふやうな事は決してしなかつた。最初から、さきのさきまで、よく見通しをつけて、ちやんと諦めてゐた。限りありと見た此現世に於て、出来るだけの幸福と光榮とを得やうとする努力が、異教思想の特色であつた。そこにまた希臘人特有の運命觀もあつたのだ。

希臘の古劇は一種の宗教觀に基いたもので、一面から云へば

運命の不可抗力を示した者だと見られる。たとへば *Orphoelen* の *Oedipus Rex* でも一天萬乗の英邁の君が、一朝運命の數奇に弄ばれては、あはれな乞食とまでなつて了つた、すべてアポロンの神託その儘に成り行く事を示した一種の運命劇である。人間がいくらじ、たば、たしても、天地を貫く一大靈氣、一大偉力の前には、當然の支配を甘受せねばならぬ事を示したものである。私は現代文藝にあらはれた *Andreyev* や *マアテルリンク* や、その他新浪漫派の名のもとに呼ばれ得る多くの作家が、明かに此運命の不可抗力を認めた者の多いのを見て、そこに此異教思潮の意義を想はずにはゐられない。

はじめまだ智力の明敏でないとき、人は情意の促すがまゝに

色々の希望や欲求を抱く、之が即ち希伯來思想の時代で、その希望を理想境にして、神や天國といふものを希伯來人は作つたのである。之を近世で云へば浪漫派の空想時代憧憬時代に相當するので、さていよ／＼その慾求の實現されない事を知つた時、そこに所謂現實曝露の悲哀を感じる自然主義時代が来る。行きつまつた決定論の人生觀も生するのである。しかしなほ更にそれが一步を進めて現代のやうな、深い本當に聰明な理智の力が出来る、希臘人のやうな運命に對する冷靜な諦めを得て了ふ。徒に現在の人生を悲觀し煩悶することの代りに、限りありと知りつつ、なほも健氣に求めて止まざる努力と奮闘とを續けるのである。その限りある世界に在つて十分現前刹那の享樂を求め

て止まない、これが即ち自然主義以後現代の思潮の著るしき特徴ではないか。

なほ一つ言ひ添へたいのは、希臘人は真に聰明な智力を以て事物の有の儘を觀察したるが故に、單に人生の悲しむべき半面をのみ見ることなく、光明善美な側をも併せ觀察し得た。従つて自然主義時代の人たちのやうに、事物の眞を見ると云つて決して厭生的になることはなかつた。醜惡とともに善美を、暗黒と共に光明を見得る者にしてはじめて、明敏なる智力を有するものと云ふべきではなからうか。現代の人々が自然主義者の悲觀より更に一步を進めて、光明歡喜の一面をみとめ、恣くてよく人生の全面を透察するに至つたことは、確かにすぐれた深き

に徹する智性のはたらきである事を思はねばならぬ。

3 現在生活の享樂

今人の現世主義——今日を享樂せよ——レミ・ドゥケウルモン——現代の宗教——オイケン
の宗教觀——建築に於けるゴシック式とルネ
サンス式——ラスキンの説——希臘人の現世
思想——人間本位——神の思想——井イナス
——ニイチエの美的個人主義——その超人説
——シヨウの「人と超人」——神と超人と——ア
ルモンの説——希臘のアンテイアス——自我
の解放——個人主義——希臘人の神——聖書
——プロメシアスと約百との比較——政治上
の自由——モオリス・バアレスと「自己の崇拜」
——その作品

文藝思潮論

Nature, paraitre, disparaître: oubliez le dernier terme. La sagesse humaine est de vivre comme si l'on ne devait jamais mourir, et de cueillir la minute présente comme si elle devait être éternelle

— Remy de Gourmont, *Une Nuit au Luxembourg*, p. 160

生れ、現はれ、滅す、唯だこの最後の語を忘れよ。さながら人間は死せざるものの如くに生き、現在の刹那をさながら永遠なるかの如くに味へよ、是れ人間の智なり。(レミドウケルモン「リュクサンブルグの一夜」)

次には異教思潮の現世主義、即ち天國や未來を祈願せずに、

現在當面の生活を享樂して人生の歡樂に酔はうとする傾向、これが即ち現代思潮の一面であつて、また中世などの基督教思想と全く相反する點である。

基督は天國を地上に實現すべしと教へたにも拘はらず、中世

以後の基督教徒はどこまでも現世を否定して惡魔の巢窟となし、苦患に満ちたる穢土であると觀じた。地上のすべては空の空 *vanitas vanitatum* (傳道の書)で、無上の幸福は之を來世に求むるの外なき者と信するに至つた。然るに現代に現はれてゐる異教思想は宗教の上にも道德の上にも、來世とか天國とかいふ考を一切放棄して了つて、ただこの現在の生活に満足を得やう、充實を求めやうとするので、従つて其結果が自我主義となり、本能主義となり、個人主義となり、現實主義となり、また享樂主義となり、或は倫理上にいふ所の功利説や快樂説を盛ならしむるに至つたのである。世に最近の思潮を呼ぶに新希臘主義の名を以てする人のあるのは恐らく此點に着眼したのであらうと思ふ。

かの羅馬の詩人 ホラティウス Horatius が歌つた「未來をあてにはせず唯だ今日を享樂せよ」Carpe diem, quam minimum credula postero といふ言葉は、これまたやがて儂らざる現代人の聲であらう。(ラスキンの著『野生の橄欖の冠』'Crown of Wild Olives'の序詞参照)

佛蘭西の文壇に、いま詩人として批評家としてまた小説家として雄視してゐるレミ・ドゥ・グルモンは、この異教思潮を代表する最も大膽なる壯快なる思想家の一人である。其肉的快乐説と自我中心の本能主義にはかのニイチエ等の所説とは稍々方向を異にして、更に深く新人の心を動かすに足る者がある。彼の名作『ルクザンブルグの一夜』*The Nuit au Luxembourg* (近頃英譯も出來た)は、神人の對話をかりて巧みに作者の思想を書いたもので、こゝにいふ

現世主義は此一巻の隨處に現はれてゐる。

Il n'y a de noble créatures humaines que celles qui s'adorent elles même et qui s'étudient à tirer de leur nature tout le vain bonheur qui y est contenu. Vain, mais réel, et seule réalité. Savoir que l'on n'a qu'une vie et qu'elle est limitée ! Il est une heure, et une seule, pour vendager la vigne; le matin, le raisin est âpre; le soir, il est trop sucré. Ne perdez vos jours ni à pleurer vers le passé, ni à pleurer vers l'avenir. Vivez vos heures, vivez vos minutes. Les joies sont des fleurs que la pluie va ternir ou qui vont s'effeuiller au vent.

— *The nuit au Luxembourg*, p. 100.

「貴き人間は先づ自己を愛し、自己の本性よりしてそのうちに在る凡へての空なる幸福を取り出ださむとする者に外ならず。幸福は空なり、されどそれは眞にして、また唯一の眞にてあるなり。人は唯だ一の生を有するのみにして而かもその生は有限なり。思へ、かの葡萄の實を摘む時は唯だ一時あるのみ。朝には酸く、夕には既に甘きに過ぎたり。過去のために嘆き、未來のために嘆いて日を過すこと勿れ。なむぢの時を生きよ爾の分秒を生きよ、歡樂は花なり、雨降らば色褪せむ、また夜半に風の吹かぬものは」

さて恁ういふ現世主義の爲めに、直接最も烈しい變化を受けたものは宗教である。人は多く現代に於ける信仰の衰退を説くが、それは寧ろ宗教その者に對する人々の考へかたの變化、宗教の現世化と見なすのが至當ではなからうか。またかの宗教に對する懷疑の風潮なども、一方から言へば權威の打破であるが、實は近代人の人生觀があまりに現世的になつたために、舊信仰が力を失つたに過ぎないのではいか。此點に就てはオイケンも同じやうに説いてゐる。即ち現代人の考では、科學の進歩物質文明の方などによつて、吾々は現實界に於ける十分な満足を得ることが出来る。かの空漠たる天國を夢みるよりも、遙に手近な確實な存在を有する此眼前の生活にこそ努力すべきであつ

て、また他を顧るの暇はないと、人々は思ふのである。つまり現實感があまりに盛な爲めに、宗教的欲求がなくなり、其結果はやがて宗教を一種の幻覺イラジヨシなりと見、anthropomorphismに過ぎないとさへ觀するに至つたのだ。之を分り易い譬で云へば、人が老いて一方に智能が鈍り、他方にまた體力が衰へて、すべての物的肉的願望が少くなると、自ら來世をたのみ神佛を信仰するが、之と反對に歳もわかき理智の力も盛に、またすべての自我の欲求が熾であつて、現世に對する希望や執着が強い間は、現在生活に忙殺されてお寺詣りの餘裕も無いわけである。さて恁うして出來たのが、現代のオイケンなどの宗教觀である。即ち現在の人生に對して、以前の基督教のやうな消極否定

の態度を取らずに、どこ迄も人生を肯定して、現在に努力しやうといふ熱意に根ざしたる、享樂と活動とを根本にしたる新宗教を鼓吹する人が多くなつたのである。オイケンオイクンは固よりニイチエのやうな極端な自我主義に反對してはゐるが、それと共にまた自己を實現し自己に歸るといふ事を以て神の要求だとして説いて、さて下のやうに云つた。教會を維持して行かうといふならば、最早在來のやうに宗教を救濟所アソシエーションとして見る浪漫的な靜寂な考へかたでは駄目である。眞の現世の享樂、充實生活の福音を説く者でなければならぬと彼は云つてゐる。

さてこの異教思潮の現世主義は先づ著るしく藝術の上に現はれた。たとへば中世の基督教を代表するゴシック建築が、凡て高

く天に冲する尖塔で成り立つてゐるのは、いかにも地上生活を離れて天國にあこがれる心持を現はしてゐるに對し、かの重々しいどつしりした感じのある文藝復興ルネッサンス式の建築は、飽くまで地上現世の生活に執着する希臘思想を表現するものであらう。この點に就てラスキンラスキンは、『近代畫家論』第五卷第九篇に下のやうに云つた。

All the nobleness as wells as the faults of the Greek art were dependent on its making the most of this present life; its dominion was in this world. Florentine art was essentially Christian, ascetic, expectant of a better world, and antagonistic, therefore, to the Greek temper. So that the Greek element, once forced upon it, destroyed it. There was absolute incompatibility between them.

—Modern Painters, V, Ch. iii. 1.

「希臘藝術の短所も、またその凡べての崇高も、皆現在の人生を重むする

のによるのだ。その領域は全く現世にある。フロレンスの藝術はその本質に於て基督教的禁欲的で、よりよき來世を期待する、従つて希臘の精神とは反對である。だから一たび希臘風が之に強いられては忽ちにして滅びた。二者には到底兩立すべからざる點があるのだ。」

すべて現在生活を中心にして考へられてゐた希臘では、幸福といふ觀念も希伯來人のそれとは異つて、天上の樂園などは夢みなかつた。現世に於て富を得健康を得、また美しきもの愛すべきものを得ることが、彼等にとつて何よりの幸福であつた。Solon^{ソロン}の言葉として傳へられてゐる幸福説に、『人もし四肢すこやかに、病なく、不幸なく、兒孫榮え、自らも風采よければ、またそのうへ臨終も事なければ、まことの幸福と呼ぶことを得む』とある。また秀抜な人物といふ觀念も、基督教でいふ聖者のや

うな超越的の者ではなく、希臘人の飽くまで肉現世的の英雄であつた。ホオマアの詩にある Achilles^{アキレス}の如きは、智と美と勇とを兼備した點に於て、希臘人の理想的英雄であつた。

また希臘人はすべてを humanize した。かれ等が神話に現はした思想も、全く人間本位であつた。かれらには神人の區別といふものが無かつた。Protagoras^{プロタゴラス}の云つたやうに、『人間は萬物の尺度』*ἀνθρώπου μέτρον πάντων* であつたが故に、その多くの神々には一として神様らしいのは居ない。外貌といひ性格といひ、凡べてが地上の人間である。希臘の神々は嫉妬もすれば怒りもする。亂暴も働けば泥棒もやりかねない。それぞれ明かな確かな個性を具へた謂は、地上の英雄に過ぎない。希伯來の宗教にある

やうな超自然的な靈性を具へた神さまとは、全く性質を異にしてゐる。希伯來人はすべてを唯一至上の神エホバに歸して考へたが故に、森羅萬象一として神意の外に顯はれたる者に非ざるなしと見た。天地山川の美を觀じても美その者を貴ぶにはあらずして、その背後にありと信じたる神の榮光を拜したのである。殊に大なる神の御前に在つては、蠢爾たる人間の如き殆むどいふに足らずとして、ひたすら其至高至大の靈を拜した。『視よもろくの國民は桶のひとしづくの如く、權衡のちりの如くに思ひ給ふ、島々はたちのぼる塵埃の如し。レバノンには柴にたらず、そのなかの獸は燔祭にたらず、エホバの前にはもろもろの國民みななきにひとし、エホバはかれら無しもの、如く空きもの』

の如く思ひたまふ』(以賽亞書四十章自十五節至十七節)とまで云つたが、此點に於て、希臘人が自然を自然そのものために愛し、また飽くまでも人間性情の美を重むじたのとは眞に好個の對照をなしてゐるではないか。

恁くの如くにして、希臘人は何よりも先づ人間自然の本能と、肉體生活の美を貴むだ。愛と美とを代表した女神ギイナスの讚美は、よく此方面の思想を現はしたものである。生命の強さを與へ人生の歡樂を與ふる方として、昔から多くの詩人は此女神に熱意をこめた讚美の歌を捧げた。

さて異教思潮のこの現世主義を、近代に於て最も大膽に露骨に宣傳し謳歌したる思想家は、獨逸のニイチエであつた。かれ

が基督教思想に反抗して本能生活の満足を唱へ、美的享樂に基礎を置いたる個人主義を絶叫した壯快の所説は、確かに近代の人心に最も痛切な反響を呼び起したものであるが、要するにそれは、三千年の昔の希臘思想を現代に復活したものに外ならぬのであつた。かれの思想は既にいくたびか我文壇に紹介せられたるもの、今更私がこゝに繰り返す迄もなからうが、かれは希臘羅馬の、征服者勝利者の道德を以て、主の道德なりとして之を唱道し、被征服者なる猶太人の基督教道德を以て奴隸の道德だと見做した。勝者勇者の道德には『生の喜び』*la joie de vivre*が溢れ、勇氣と力と誇りとが充ちみちてゐるが、弱者敗者の道德に至つては全く屈從的で、そこには充實したる力と云ふものが

見られないと考へた。かくしてかれは基督教の愛他主義平等主義に反抗して、自我主義不平等主義を唱へ、*Schopenhauer* 等が人生否定の厭生觀に對して、人生肯定の英雄主義を叫びだ。

しかし彼の所説のうちで、現代に於ける異教思潮の要素を最もよく現はしてゐる部分は、いふ迄もなく其超人説である。かれは *"Zarahustra"* に於て、超人は地の意義を代表する、同胞よ、願はくば地に忠なれ。かの天上の希望を説くが如き空漠の言に耳を傾くる事勿れと教へた。かれは人生に於ける不斷の向上と努力とを説き、自我を中心としたる進化發展に最上の意義を置いた。かの博愛といひ平等と云ふが如きは寧ろ一の罪惡であつて、自我の意力によつて我等は遂に精神的人格的の意味で云ふ

貴族であらねばならぬ。さうして出来たのが即ち超人である。おもへば近世の實驗科學と自然主義の思潮は、まさに基督教の神を破壊して了つたが、それに代つて現はれたものこそ、此地^上現世を重むじた超人説に外ならないのである。もはや偉大と崇高を神の中に見出すことの出来なくなつた現代人は、こゝに超人を信仰してそれを望むやうになつた。Darwin^{ダーウィン}は吾人に向つて、人間は虫から進化して遂に現在の所までやつて来たのだと教へた。嘗て進化の道程に通つて来た猿といふ過渡時代があつたやうに、吾々は今この人間といふ一階段に在る。この人間の儘に、吾人は向上し進轉して遂に「超人」の域に達すべく努力せねばならぬ。超人は恁かる意味に於て嘗て昔の希臘人が考へてゐ

た地上の神であり、人間の英雄なる者に外ならぬではないか。私はここに至つて、またシヨウの『人と超人』Man and Supermanに現はれた思想を想ひ起さざるを得ない。勿論英國の此戯曲家はニイチウのやうに明確に超人の理想を示してはゐなかつた。シヨウの超人はつまり現在の普通人よりも遙に強い健康を有し、すぐれたる脳力を有する者の謂で、それはつまり人種改良によつて進化が齎らす所の社會的所産であると彼は云つてゐる。が、恁くの如きは即ち異教^{バイガン}の所謂「神」と甚しく類似したる觀念ではなからうかと私は思ふ。シヨウはまたイブセンの作『皇帝とガリヤ人』^{本書自三四頁至三八頁参照}を批評して、あの戯曲にあらはれた「第三帝國」と、自我を神なりとする人——即ちここに云ふ超人——と兩方

を結び付けて、下のやうに論じた。

“Emperor and Galilean might have been appropriately, if prosaically, named The Mistake of Maximus the Mystic. It is Maximus who forces the choice on Julian, not as between ambition and principle—between Paganism and Christianity—between “the old beauty that is no longer beautiful and the new truth that is no longer true,” but—between Christ and Julian himself. Maximus knows that there is no going back to “The first empire,” of pagan sensualism. “The second empire,” Christian or self-abnegatory idealism, is already rotten at heart. “The third empire” is what he looks for: the empire of Man asserting the eternal validity of his own will. He who can see that not on Olympus, not nailed to the cross, but in himself is God: he is the man to build Brand’s bridge between the flesh and the spirit, establishing this third empire in which the spirit shall not be unknown, nor the flesh starved, nor the will tortured and baffled.

—Shaw, *Quintessence of Ibsenism*, pp. 65, 66.

「皇帝とガリラヤ人」は、殺風景な言ひ方だが、しかし適切に、神秘家マックスモスの過誤だと名づけてよからう。野心と主義と、——異教主義と基督教主義と——もはや美でない古い美と、もはや真でない新しい真と、これら二つの者のいづれを選ぶといふのではなく、基督とジュリアン自

らとのいづれを取るかといふ選擇を、皇帝に強いた者はマックスモスである。異教の肉感主義の第一帝國に今更歸られもしない事はマックスモスも知つてゐた。さりとて第二帝國即ち基督教或は自己否定的の唯心論も、既に根本から駄目になつてゐる。そこで彼が求むる所のものは第三帝國——即ち自らの意志の永遠に正確な事を主張する人の帝國である。神はオリムパス山上に在るのでもなければ、十字架上に在るのでもなくして自我のうちに在るのだと考へる人、さういふ人こそ此第三帝國を建設して、ブランドの靈肉の間の橋梁を造る人である。第三帝國に於ては靈が知られずにあるといふ事もなく、肉が飢える事もなく、また意志が苦められ敗れたる事もないであらう。

—「イブセン真髓」六五—六六頁

靈肉一致の第三帝國は即ち超人の國を意味する。超人その者は即ち地上の神を意味するのである。

またさきに云つたグルモンも、此點に就て下のやうに云つた、

Il ressemblerait beaucoup à un homme, il ressemblerait beaucoup à moi-même, qui suis un surhomme. Multipliez-vous à l'infini et vous avez le seul Tout-Puissant réellement concevable. Les religions et les philosophies modestes qui ont imaginé Dieu sous la forme d'un homme paraissent demeurer au moins dans les limites d'une analogie raisonnable. Moi, l'un des dieux qu'adoreraient les hommes, je vous le dis en toute humilité divine : je suis un homme et Dieu est un homme.

— Une Nuit au Luxembourg, P. 99.

神は人の如く、我の如く、あるだらう。我は超人である。爾自らを無限に多からしめよ。さらばそこに唯一の、眞に考へられ得べき全能の神が出来る。神といふ者を完全な人間の形にして想像した宗教や控へ目な哲學は、今日まで尠くとも理屈になつた類似の範圍内に殘つた。我は、人々の崇拜する神々の一人であるが、十分神さまらしい謙遜をして憊う云はう。我は人である。神は人である。

憊ういふ風に神を地上に引きづりおろして、人間化して了ふといふ異教の態度は、佛蘭西のこの新思想家の作品のいづれに

も見られる。(メレジコウスキイ著 “Tolstoi as Man and Artist” 二六七頁—二六八頁をも参照せよ)。

私はいま現世主義を論ずるに當つて、はしなく希臘神話にある巨人 Antaeus の話を想ひ出した。「地の子」 terra filius と呼ばれたこの巨人は、足が地上に在る間は、力まことに山を抜くばかりであるが、一たび地を離れて空中に上げられると全く力を失つて無能になる。此弱點を Hercules が觀破して、遂に見ごと彼に打勝つたといふ話がある。思ふにアンテイアスは心靈を意味するので、此の一寓話は物質界肉界を離れ地上現世を離れては、心靈の殆むど力なき者である事を示したのであらう。

異教のこの現世主義に聯關して、私はここに「自己の崇拜」とい

ふことに就て一言しやう。

自我の解放と個人の自由を強く烈しく主張する傾向は、遠く源を文藝復興期の異教思潮勃興の時に發したことは、既に上にも述べた。近代に及むでは先づルッソの呼號をはじめとして、前世紀の浪漫的時代より自然主義時代に至つて、益々熱烈矯激の度を加へ、最近に至つてまた更に一段の力を増したるやの觀がある。今日すべての思想、すべての藝術は、益々あざやかに個人的色彩を帯びて來た。一切の權威を排し傳説を破壊し、そこに清新強烈の自我を基礎とした新生活を創造しやうと努むるに至つた。唯だその個人主義が、さきの自然派時代のやうに虚無否定の一面にのみ偏せずして、今は肯定し建設せむとする努

力の盛なことが、現代にあらはれた著るしき變化である。(近代の個人主義に就ては、畧ば「近代文學十講」第三講第三に述べた)。

さてこの權威を排し個人の自由を重むる現代の傾向は、世間に既にいくたびか説かれた問題であるから、之に就ては私は今更言を費さない。唯だこれがまた希臘に發した異教思潮の著るしき一面であつて、希伯來思想の流れとは全く反對の傾向の現代に現はれたものである事を一言しておく。

私はさきに本書の序論で二大思潮を對照比較したとき、希臘のアポロの神殿にある「爾みづからを知れ」の語と相對して、聖書が説く神を知り神を畏れよといふ言葉を擧げて、一は個人的自由の主義、一は教權服從の思想だと云つた。今この點を明にす

る爲めに、二者の宗教に對する——寧ろ神に對する思想の相異を考へるのが、何よりの捷徑であると思ふ。

ホオマアには、人々みな神を有たざるべからず (Odyssey III, 48. 参照) と云ふ語があるが、實際希臘人は決して無宗教無信仰の民ではなかつた、それはちやうど現代の人が決して無宗教でないのと同じの意味に於てである。唯だ異教思潮にあらはれた神の思想は、人間が造り人間が考へた神であつて、希伯來の神のやうに、唯一絶對の權威を以て人に臨むが如き性質のものではなかつた。希臘の方では人あつて後に神があるのだが、希伯來の方では神あつて後に人があつたのだ。前者にあつては神は人生の一部に過ぎないが、後者に在つては神がそのすべてであつた。

之は *Aeschylus* やホオマアの文學に現はれたる神と、以賽亞の書にあらはれた神の思想とを比較すれば、一見明瞭である。甚しい例をいふと、*Aristophanes* の喜劇、殊に『鳥』『The Birds』などを讀むと、盛に神様を冷かしたり、嘲弄したりした痛快な面白い文字を澤山に見るが、之などは希伯來の方では藥にしたくとも無いことである。第一希臘には權威を以て神の法則を示すべき聖書といふ類のものが絶無である。固よりかのアポロの託宣などが無いではなかつたが、それも單に或る特殊の事情の場合、一時的にその命を聴くだけであつて、謂はゞ人間の御都合主義から割り出されたものに過ぎない。決して之によつて希臘人の全生活を律し束縛しやうといふ程の力はなかつたのである。要す

るに希臘人は勝手に神を拵へて勝手にそれを信仰してゐたので、そこに何等思想上の壓迫制肘を見なかつた。かれらは如何なる場合にも、思想上絶対の自由を失はなかつた。

私は再びこの差別を明にせむために、讀者が希伯來文學にある約百の話と、希臘神話にある Prometheus とを較べられむ事を希望する。約百もプロメシアスも兩方とも正義の士でありながら、しかも神のために不相當な苦痛を與へられた。約百は神を畏れ惡に遠ざかる正しい人間であるのに、天は之に向つてあらゆる苦患を下し、財を奪ひ病を與へ、かれが一家をさへ滅ぼした。またプロメシアスの方は人權の擁護者とも云ふべき巨人、わざ／＼天の火を奪ひ來つて之を人間に與へた。が、それを

Zeus の神は怒つて Caucasus 山上の岩に縛り付け、鷲をして日毎にその肝臓を啄ましめたといふ。ここまでは兩方ともよく似寄つた話であるが、約百の方には、エホバの神からどんな目に合はされやうとも、絶対無限の服従のほかは無かつたのである。天地の事がお前などに解るものかといふ神様の一喝に遇へば、それ切り畏まつて引込む。何故あつての苦患だか、神の方でもそれは云はず、約百も聞かうとはしない、全く御無理御尤もで恐れ入つてゐるのだ。そこになると希臘のプロメシアスの方には、自覺もあれば自由もあつた。儼として權威に服しないだけの自我の主張があつた。エスキラスの書いた『プロメシアス』を讀むで見ると、第一プロメシアスはジウスの神が怪しからぬと云

つて、平氣で神を呪つてゐる。決して無條件の服従なぞはしないで、どしどし神さまをやつつけてゐる。ハアキユリズが來て、あの鷲は殺されて了ひ、鎖も遂には放たれてしまふと、いよいよ神様との對決になつて、終結には作者自ら大に神の不當を攻撃するやうな具合にすら成つてゐる。その態度がすべて約百とは全然正反對に出來てゐるから面白い。

以上は宗教の方面から見たのであるが、政治上に於てまた希臘人が如何に個人の自由を重むじたかは、歐洲の古代史を繙いた人の何人も首肯する所であらう。たとへば、希臘人が「自由」といふ意味に使つた *liberty* といふ言葉は、全く「言論の自由」の意であつたといふ如き、よくこの點を證してゐると思ふ。

さて目を轉じて、現代文藝に就て自我の満足と自由を主張する傾向を見ると、之は殆むど例證のあまりに多く餘りに煩はしきに堪氣ないのである。最近三四十年歐洲のすべての作家に多少なりとも著るしく此傾向のあらはれてゐない者は一人もないが、私はこゝにその最も大膽なる壯快なる代表者として、*Maurice Barres* の名を擧げて、この一節を終らう。

かれは現代の佛蘭西文壇における最も急激な新派の先驅者であつた。一切の權威と傳説とを侮蔑し、自我の外なるすべての者を目して野人と呼むだ。それは以前耽美派の人たちが世の俗衆を嘲つて *Philistine* と云つたよりも、更に烈しい更に大きい意味に於てであつた。個人主義の人、快樂主義の人として、かれ